

人間集団の三類型

——アッカドのサルゴンによる史上初の帝国建設——

中川 洋一郎

はじめに——よそ者という視角による集団規模拡大の三類型

- I 小さな群れ——親族・仲間（よそ者がいない集団）
 - II 中規模集団——疑似親族・共同体（よそ者を身内・仲間にしてできた集団）
 - III 大規模組織——国家と社会階級の成立（よそ者をよそ者のまま取り込んだ集団）
 - IV 遊牧民型統治の特異性
- おわりに——アッカド帝国の建国で芽生えた遊牧民型国家

はじめに——よそ者という視角による集団規模拡大の三類型

今日までの人間集団の発展について、さまざまに議論されてきたが、本稿では、よそ者という視角から、ヒトの集団を三つの類型に分けて、その歴史的過程を検討し、併せて、遊牧民による征服・支配の結果としての「主権・社会階層化」の確立こそ、国家と呼ばれる新規の組織を成立させたと主張していく¹⁾。

第一類型（親族型）は、親族（あるいは、身内・仲間）だけで小さな群れを作っている集団である。この類型では、集団内に、よそ者は（原則的に）いない²⁾。第二類型（疑似親族型）は、もともと

1) 通常、集団の類型的議論で3分類する場合、平等的（egalitarian）、ランク的（ranked）、階級的（classed）とすることが多い。本稿では、「よそ者を史上初めて大規模に併呑した前3・2千年紀における遊牧民型諸国家の成立こそ、主権と社会階層化という、その後における国家の成立要件を決めた」ことが主要な主張なので、あえてよそ者という視角を採用した。さらに付け加えると、「ランク的社会のままでも、希有な条件が整う必要があるとはいえ、遊牧民的経路に依らない国家形成は可能であった。例えば、日本のように」というのが、本稿の伏線のな主張である。

2) 本稿で「よそ者」とは、端的に「集団の外にいる人々」を指している。しかし、これは日本の社会学における主要な論調とはいささか異なるようである。例えば、岩本・下田（2022：15-16）による「よそ者研究史」の概括によると、あるホスト集団・社会に外からやってきて、集団内に居住しようとするが、しかし、なかなか同化できずにいる彼らを厄介者・邪魔者と見るのが正しいのか、いや、むしろ、彼らがホスト社会に何をもたらしすることができるのかを検討するべきだという問題意識が強いようである。つまり、（この事例が地域社会学という限定された領域での議論のせいかもしれないが）社会学界では、「よそ者」とは、外からホスト社会にやってきて、すでに集団の中にいるのに十全なメンバーとして認められずにマイノリティと扱われる者を指すというように、限定的に使用することが通例のようであ

とはよそ者であった者同士が、婚姻・儀礼・慣習・訓練・神話・血縁幻想などの過程を経て互いに身内・仲間にして（疑似親族化）、集団内に取り込まれてできた中規模の集団である。この具体的な事例としては、小さくはバンドの連合で形成されている部族、大きくは文化・歴史を共有するという幻想を基礎とする民族、さらに、分裂よりも統合を優先する国民国家などが挙げられる。これら第一類型と第二類型、つまり、親族集団と疑似親族集団は、自分たちが自然発生的・自生的に形成されたことを信念とする集団である。

さらに進んで、第三類型（支配・服従型）は、社会階層化された集団、すなわち、よそ者をよそ者のまま組織内に取り込んだ集団である。しかし、そもそも「よそ者をよそ者のまま組織内に取り込んだ集団」など、長い間、ヒトの歴史には存在しなかった。ここで遊牧民が登場する。遊牧民が遊牧を行う時、群れとして取り込んだ家畜（ヒツジなど）は、もともとヒトではないのだから、どうあがいてもよそ者のままであり、疑似親族化など不可能である。すなわち、動物（ここでは、非ヒトのこと）を組織内に取り込む思想・技術・経験を持った人々（遊牧民）が、農耕定住民によって作られていた第二類型の集団を征服・支配して、疑似親族型の枠組を破壊することで、よそ者を組織化することに成功した。かかる遊牧民型の組織化がひとたび実現可能かつ有効だとわかると、やがて各地に国家と社会階層化が成立し、中央集権的強制力による支配と服従が制度化された。

よそ者という視点から見た集団規模拡大論で、大きな鍵となるのが、類型の間での移行過程の意義であろう。第一類型（小さな群れ）から第二類型（中規模の集団）への移行は、例えば、最近、ユヴァル＝ノア・ハラリがセンセーショナルな形態で提起した「認知革命」という、今から7万年前から3万年前の旧石器時代末に起きたヒトの認知能力の向上に起因されるであろう。一方、第二類型から第三類型（大規模な組織）への移行を経た集団は人為的・意識的に組織化される側面が急速に強まり、集団としての競争力を獲得するので、各地の首長制社会などの諸集団（第二類型）を征服し、支配するようになった³⁾。

る。そもそも（本稿で言う）「小さな群れ」についてはその範囲が可視的であり、明確なので、「よそ者」が誰（集団の外のヒト）を指すかは明示的である（例えば、徳田剛 2007のジンメルなどを参照）。しかし、旧石器時代末に知的能力が向上して、抽象的な絆を認識できるようになると、祖先を同じくする人々の集団（リネージ、同族集団（部族）、あるいは、宗教的共同体など、眼前の可視的な群れを超えた中規模集団を形成できるようになる。原基的集団ではよそ者であったヒト同士が、観念的絆によってよそ者ではなくなった段階と言えよう。

- 3) フォーテスとエヴァンス＝プリチャードは、すでに半世紀ほど前になるが、アフリカにおける政治体制について、「きわめて規模の小さい社会」「政府をもたない社会」「政府をもつ社会」という三類型があると述べて、その後の議論の出発点を提供していた（フォーテス、エヴァンス＝プリチャード 1972: 25）。彼らは、それら三つの政治体系を発展的・進化論的に見ていたのではないが、かかる組織の三類型を人口規模と関連付けて論じていたので、集団発展の三類型という事例として参考になる。

今日の世界は、国家権力という集中的な権力機構を打ち立てるに当たって、組織編成原理が機能本位原理である諸国家が中心になっている。そもそも機能本位原理の出現は、遊牧民による組織編成原理の転換によって生じた。今日、遊牧民型の諸国家は、米欧自由主義国家群と中露専制・独裁国家群と二つの陣営に分かれて、政治的にも経済的にも覇権をめぐる激しく対峙している。メソポタミアの地で、前3千年紀から前2千年紀にかけて起きた第二類型から第三類型への移行のあり方こそ、今日の国際体制を決定したと考える。

I 小さな群れ——親族・仲間（よそ者がいない集団）

親族、および、互いに熟知して顔見知りとだけで作られている小さな群れが、人間集団の第一類型であり、同時に、原基的形態である。

1. 初期人類の組織形態

霊長類の中で、ヒトと最も近い種であるチンパンジーと遺伝子的に分かれたのが、およそ700万年前である。類人猿の社会構造の基本が人間社会のそれと共通すると想定すると、霊長類社会、とくにチンパンジー属（チンパンジーとボノボ）という人間に最も近い類人猿2種の社会との対比で、人間社会の制度を成立させる進化史的な基盤を検討することが可能になる。類人猿社会に人間社会の特性の原型や変型を追究することには意味がある⁴⁾。

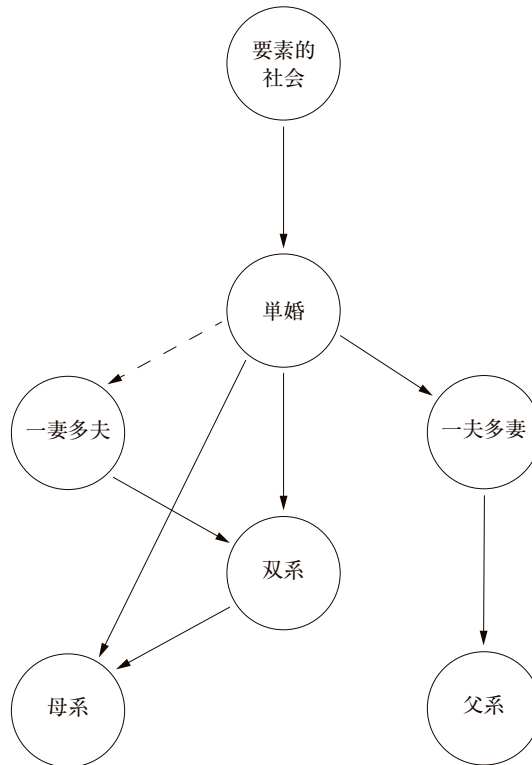
霊長類の集団形成については、足立薫が伊谷純一郎（1987）「霊長類社会構造の進化」に依拠して、集団の継続性を論じていて、「狩猟採集民のバンドとチンパンジーの父系BSU [Basic Social Unit] との類似性から、ヒトの社会は、一夫多妻から父系へという [本稿図表1における右側の] 類人猿の系列の進化に区分される可能性が指摘されている」（足立 2009：8）と想定している⁵⁾（なお、[] 内は本稿筆者による。以下同様）。

旧石器時代初期・中期に限ると、ヒトの原初的な組織は、霊長類の延長線上にある可視的な範囲に留まる小規模の群れであったようである⁶⁾。日本の霊長類学者たち（例えば、今西錦司→伊谷

4) 「こういうことが可能になるのは、社会のオリジンが社会学者や哲学者が考えているよりはるかに古く、類人猿の社会構造の基本が人間社会のそれと共通するからである。[...] 類人猿社会に人間社会の特性の原型や変型を見いだすのは、『原型探しゲーム』ではなく、人間社会の進化史的基盤を発掘し、相対化することでより深い理解を求める作業である」（黒田 2016：22）。

5) 図表1は、伊谷（1987）の図を足立が改変している。同様な見解として、「ここで実に興味深いことは、テナガザルと新世界ザルの祖型がそうであるように、雌偏向分散と単雄単雌集団という形質は運動しているように見えることである。これを人類の祖先にまで当てはめれば、彼らは単雄単雌集団を基本として一夫一妻の婚姻形態を持っていたと考えられる」（中川尚史 2012：88）。なお、「ピグミーチンパンジーが人類社会形成のモデルになる」という考えに同意していない研究者もいる（例えば、森 1990）。

図表 1 Basic Social Unit の進化的移行過程



(注) 本図は、伊谷純一郎 (1987) 「霊長類社会構造の進化」『霊長類社会の進化』平凡社、297-325頁から改変のうえで引用されている。

(出所) 足立薫 (2009) 「非構造の社会学」河合香史編『集団—人類社会の進化』京都大学学術出版会、9頁。

純一郎 → 黒田末寿の系列) が、人類社会の進化の解明を目指してきた。彼らによると、群れ (血縁・親族組織) → 拡大家族 (疑似親族原理) → 国家 (制度・権力・支配服従) という三類型を経て、ヒトの組織は発展してきた⁷⁾。

- 6) 霊長類の中でも最もヒトに近いチンパンジーと遺伝子的に約700万年前に分かれて、その後、約200万年前に旧石器時代になった時、初期人類は、現在観察されているようなバンドと称される小規模・自立した集団で暮らしていたかどうかは不明である。食料入手は、類人猿と同様なやり方を取っていたと類推できるので、彼らは依然としてチンパンジー・ボノボと類似の食糧捕獲方法を取っていたのではない。だとすれば、狩猟採集生活と呼ぶことはできないので、現代における狩猟採集民の生活実態から抽出されたバンドという形態はまだ形成されていなかったはずで、むしろ、チンパンジーと同様の組織形態で暮らしていたと考えるのが妥当であろう。その限りでは、霊長類で最もヒトに近いとされるチンパンジー・ボノボと分かれた後の集団のあり方に関して、例えば、C.R. ホールピイクは「旧石器時代初期については、すべてに関して、わからない。証拠も何もないのだから」(HALLPIKE 1992b: 80) と、断定している。ヒトと類人猿の集団の比較類推には、自ずと限界があるということであろう。

2. ダンバー数という、ヒトの原基的集団規模

多くの類人猿も、初期人類も、単独で行動することはあっただろうが、通常、彼らは、群れの中でその一員として生存していた。身内は、血縁関係にあるか、あるいは、互いによく知り合っている仲間である。かかる小さな群れの規模について、ヒトが維持できる人間関係の限界として、ダンバー数（Dunbar's number）が提起されている⁸⁾。現生人類は、誕生してから約20万年もの間、小規模な集団を作って暮らしてきた。狩猟採集社会に入ると、彼らの居住集団のサイズは、先に見たように、小さい規模では15人程度の場合もあるが、人類は長い歴史の中で、150人程度の集団で生活してきたことが定説である。現代社会においても、真に親密な関係を維持できる人数には限りがあることが示唆されている（例えば、曾我 2013：28-29）。ダンバー数より小さな集団では、制度が存在する必要がない。制度が存在しなくても集団が統合されているのは、権力などの物理的な強制力からではなく、血縁・婚姻などの生物学的・生理的紐帯から集団が統合されているからである。本稿で言う第一類型の「小さな群れ」とは、「制度を欠いている集団である」（曾我 2013：29；尾上 2016：134-135）。

3. 現代における狩猟採集民集団（バンドとその構造）

現代における狩猟採集民の実態調査から、彼らの組織を、人間社会の中で、最も単純な社会的統合であるとして、こうした小規模の遊動的集団をバンド（bands）と呼んでいる。生活単位は夫婦とその子供からなる核家族であり、かかる核家族が数個集まって、一般的に30人から100人程度の規模の集団となる。1万年ほど前に農耕を開始するまで長い間、ヒトはこの規模の集団を作って生活をしていた。資源が豊富な時は一時的に100人ほどの集団になるが、冬季など資源が少ない時にはまた家族単位で離散していた。

バンド内では、男女や年齢による社会的分業があるが、メンバー間は、経済的に平等であり、首長のような固定した地位を持つ指導者もない。採集活動は、筋力や脚力をそれほど必要とせ

7) 特に、黒田は「自然制度」という考えを提起しているが、この場合、自然制度とは、「拡大家族間の規則」であり、言語なしで構築されているという特性があるが、（本稿で言う）疑似親族原理で統御される組織・世界と関連付けられる。「黒田末寿は、法制度のように言語を前提とする制度に先立つ〈自然制度〉が人類社会に広く見られることを指摘し、その〈自然制度〉を『持続的社會集団の規則』（黒田 1999：288）と定義する」（大村 2013：328-329）。

8) 進化心理学者のロビン・ダンバーは、集団のサイズと人脳新皮質のサイズの間には強い相関関係が見られると主張している。彼は霊長類36種を対象とした研究から、ヒトが安定的な社会関係を維持できる人数は150人程度であると推定した。この数はダンバー数と呼ばれ、狩猟採集社会や軍隊などで観察される集団サイズとよく合致すると主張されてきた。ダンバー数は、単に知り合いの人数ではなく、互いの名前や顔、人間関係を記憶し、関係を維持できる人数を指している。これは、脳の処理能力に限界があるためと考えられている。Cf. DUNBAR (1992; 1993; 1998; 2023)。

ず、道具も単純なもので技術的にも容易であることから、おもに女性がこれを担い、狩猟をおもに行う男性と機能的に分業していることが多い。狩猟は個人的能力の果たす役割が大きいので、年齢や世代による役割分担も必要になる。ただ、男女ともに担う役割や共有する空間や時間も多くあり、いわゆる男女の性別による差別はほとんどないと考えられる。今も残る狩猟採集民として知られているのは、わずかに北米大陸北端のイヌイット、カナダのチペワイアン・インディアン、ロシア東部のギリヤーク、オーストラリアのアボリジニー、そして、アフリカのザイルのバカ（ピグミー）やカラハリ砂漠のサン（ブッシュマン）などである。これらの人々の生活地域は、農耕や牧畜などを行えない厳しい自然環境のもとにある。しかし、狩猟採集民は、もともとは地球上の各地でその気候帯（熱帯雨林、乾燥地帯《サバンナ・ステップ》、中緯度ブナ林、極地）の動植物分布に適応した生態を取っていたのであり、より恵まれた自然環境下にある温帯地方でこそ、多くのヒトが狩猟採集民として生存していた（松井 1989：64, 215）。

もしも、このような集団が、「互いに良く見知った親族関係にある者ばかり」（曾我 2013：22）であり、つまり、現に目の前にある可視的な集団で完結している場合には、本稿で言う「よそ者がいない小さな群れ」として、バンドをヒトの原基的集団と認めて良いであろう⁹⁾。

II 中規模集団——疑似親族・共同体（よそ者を身内・仲間にしてできた集団）

しかし、ヒトは、個々のバンドを超えて互いに結び付けるような観念的な絆を作ることができると。バンドで暮らすようになったヒトは、すでに今から7万年から3万年前に《認知革命》と呼ばれる認知能力の飛躍的向上を実現していたからである¹⁰⁾。現代人の直接の祖先であるホモ・サピエンスは、知的能力を働かせて観念的な紐帯を想定することで、バンドの可視的な枠組みを克服して、非可視的な絆を作り、小さな群れを超えて、系譜関係（リネージ）・部族などを形成していた。これは、よそ者をいわば同化して、同じ観念的な共同体に属する者（いわば、疑似親族）とし

9) 曾我亨によると、例えば、バカ（ピグミー）やサン（ブッシュマン）において、「社会をまとめあげていくリネージ、クランなどが存在せず、社会的統合のレベルがきわめて低いこと、男女の分業を除いて他に分業が存在しないこと、地位や身分、階級の上下関係もないこと、首長も専門家もおらず、裁判制度などもないこと、明確な親族組織も発達していない […]。親族関係については、父系・母系双方のイトコまでを親族と認知し、姻族についても同様の範囲を認知しているに過ぎない」（曾我 2013：28-29）。

10) ハラリー（2016）によれば、《認知革命》とは、約7万年前から3万年前にかけてホモ・サピエンスに見られた、認知的能力における一大変化のことである。新たな言語技能の習得によって以前よりも大量の情報伝達が可能になった。このコミュニケーション能力の飛躍的な向上の結果、集団の団結力が強化されたことで大集団による協力体制が構築され、それがホモ・サピエンスの飛躍的な発展の原動力になったと、ハラリーは主張している。

て処遇するのであるから、疑似親族化と呼べるだろう。その結果生成した観念的な絆によって構成される共同体を、本稿では数千人を擁するような中規模な集団（よそ者を身内・仲間にしてできた集団）と位置付けている¹¹⁾。

1. 可視的集団を超える非可視的な絆（理念的・観念的絆）

数十人程度の人々が形成している可視化された集団（バンド）が存在し、機能していたが、しかし、その一方で、ヒトはバンドの内外で、かなり自由に行動し、離合集散を繰り返していた事例がある。寺島秀明によると「バンド社会では、たしかに目に見える具体的集団としてはバンドよりも大きな社会組織は存在せず、それらを統合する機構も存在しないが、目に見えない人びとのネットワークが現実のバンドの背景にあって、たいへん重要な働きをしている」（寺島 2009：184-185）。すなわち、可視的な小規模集団を結ぶ非可視的な精神的紐帯がある。可視的な個々のバンドを超えるネットワークが存在するので、個々のヒトは、かなり自由にバンド間を移動している。所属するバンドを替えることがかなり自由なので、バンドという組織は意外なほどフレキシブルである（寺島 2009：189）。

それゆえ、個々の狩猟採集民は、緩い絆で結ばれて階層となつたいくつかのネットワークに属している。第一が両親と子供たちからなる家族、第二がいくつかの家族が集まってできている20人～70人規模のバンド（あるいは、ミニマム・バンド）、第三がかかるバンドがいくつか集まってできている175～475人の部族（トライブ、あるいは、マキシマム・バンド）、さらに、第四に（マイケル・マンによると）これを超える文化的集団である（マン 2002：52。バンドの人数に関する参考文献がある）。「バンドは150人程度のヒトが形成する組織で、日常的な生活の場となっている」と述べる場合のバンドそのものは可視的な集団である。その一方で、バンドを結節点として、非可視的な諸関係が、つまり、ヒトとヒトとの多様な絆（例えば、制度化されたバンド連合としての部族・リ

11) 本稿で言う第一類型（親族型）がヒト集団の原基的形態である。そこから外にいる人々はよそ者であるが、ただし、さまざまな観念的絆を作ることによって、第二類型（疑似親族型）の集団を形成し、その時点で互いによそ者ではなくなる（疑似親族化）。原基的形態であるヒトの群れについて、内堀基光が「『群れ』より大きな集団はあっても、それは物理的・実体的でない」と、興味深いことを述べている。「群居する（群れる）」という人間のあり方が、その前提として個人特性にもとづく固定的な分業や個体間の不均衡な位置取りを本来的に欠いたものである。[...] 今更ながらの指摘ではあるが、人間社会における社会的分業、性的分業、さまざまな基準による身分階層の分化などは、『群れ』的な集団性とは異なる社会の階梯で発生することがらである。[...] 種特異的な『群れ』を、ある種社会においてその最下辺から見て普遍的に認められる最大の物理的・実体的な共在様態とする。ここで『普遍的に』ということに意味が発生するのは、第一には、『群れ』が成立するより高い階梯の社会において、『群れ』より大きな集団はあっても、それは物理的・実体的でないということであり、さらには第二に、付加的な条件として、そうした集団が複数存在する場合には、おのおのの集団の下にかならず『群れ』的な物理的・実体的共在様態があることである」（内堀 2009：27-28）。

ネージ)が形成されていた。

寺島秀明は、今村仁司が「人と人を結合させる力、人びとの間の敵対を解消させ友好をもたらすものとしての《社会的絆》を social と呼んだ事例(今村 2000:29-30)を取り上げて、「狩猟採集社会は支配と従属の関係から成り立つ社会を全面的に拒否し、ただひとつ social という社会形成のための絆によって生きる社会である」(寺島 2009:199-200)と述べている。

第一類型(小さな群れ)では、絆はバンド内に留まって、集団はいわば可視的であったのに対して、第二類型では、絆は個々のバンドを超えて、非可視的な水準にまで至り、観念的・理念的な絆にまで昇華された。そもそもヒトには、社交性があるので、ヒトとヒトとの人間的紐帯、すなわち、絆は集団形成に不可欠の要素と言うべきである¹²⁾。

2. 知的能力向上によるバンド集団の規模拡大

上記のようにバンドに関する実態調査によると、少なくとも現代におけるバンドの間には観念的紐帯が築かれていて、身内・仲間からなる個々の集団の枠を超えた集団が形成されている。ダンバー数で表される「可視的な小さな群れ」をバンドと仮定すると、個々のバンドを超える観念的な集団が形成されていた。観念的な紐帯とは、リネージ、部族などの名称で表現される数千人の中規模の集団である。小規模(ダンバー数を超えない集団)から中規模(ダンバー数を超える集団)への展開では、部族など、リネージという理念把握能力が必要だから、まさにダンバーの言う「大脳皮質による認識能力」を超える抽象的な存在把握能力が必要である。

先に見たように、近年、ユヴァル=ノア・ハラリによって、旧石器時代末のホモ・サピエンスの認知能力の発展が《認知革命》¹³⁾という、かなり特異な表現で指摘された。

およそ7万年前から、ホモ・サピエンスは非常に特殊なことを始めた。[...] 彼らはネアンデ

12) Relatedness (関わり合い) で表現される (バンド内外の) 絆の重要性について、「そういったバンドに生きる人びとの凝集力となっているのは人と人を結びつける多様な絆である。絆はネットワークとなり、その結節点にバンドがある。[...] オーストラリアのピントゥピ族の研究をしているマイヤーズも、ピントゥピ社会で最も強調されるのは relatedness であると述べる (Myers 1986)。つながっていること、結びついていること、絆を保っていることである。人と人との relatednessこそが社会生活の全般を律する基盤となっている。人は relatedness を求めて、他の人の要求に耳を貸し、同情・共感を示し、交渉する。[...] その意味で、平等性も relatedness に強く結びついている。他者との良好なつながりとは平等的な関係にほかならない」(寺島 2009:198)。

13) 改めて述べるまでもなく、「革命」の原義は、「天命を革める」であり、政治的用語としては、「既存の政府・体制を暴力をもって転覆して、新たな権力機構をつくること」と言えよう。もちろん、「急激な変化」(広辞苑)という意味もあることは承知しているが、いくら集団史における根本的な変化であったとはいえ、およそ7万年前から3万年前までの4万年間という気の遠くなるような長期間に生じた事象を「革命」と命名するのは、いささか濫用に過ぎるのではないかと思う。

ルタール人をはじめ、他の人類種をすべて中東から追い払ったばかりか、地球上からも一掃してしまった。サピエンスは驚くほど短い期間でヨーロッパと東アジアに達した。[...] 約7万年前から約3万年前にかけて、人類は舟やランプ、弓矢、針を発明した。芸術と呼んで差し支えない最初の品々もこの時期にさかのぼるし、宗教や交易、社会的階層化の最初の明白な証拠にしても同じだ。ほとんどの研究者は、これらの前例のない偉業は、サピエンスの認知的能力に起こった革命の産物だと考えている。[...] 7万年前から3万年前にかけて見られた、新しい思考と意思疎通の方法の登場のことを、「認知革命」という。（ハラリ 2016：34-35）

いずれにしろ、およそ10万年前から5万年前までの期間に、「ホモ・サピエンス・サピエンスが完全な認識能力を獲得し [ていたので]、ヨーロッパにやってきたクロマニヨン人は複雑な思考をし、あらかじめ計画を立て、完全に明瞭な言語を話していた」（フェイガン 2005：44）と考えられているように、旧石器時代末期に、ヒトが認知能力の獲得において、急激な向上を果たしたことは間違いないであろう¹⁴⁾。その結果、大きな社会的な変化も生まれていたことが想定されている。

あらゆるところで、技術革新の花が咲いた。この「大躍進」の旗印ともいえる新しい特徴の多くは、洞窟絵画、彫刻、宝飾品、飛躍的に改良された道具と武器など、大変に印象的なものばかりだ。[...] 創造と発明という人間の能力が見事に開花した。[...] さらに、そうした技術革新は、社会的・文化的に大きな変化が起っていたことも示している。新しい道具とともに新しい社会的な取り決めも生まれた。[...] 何らかの形で交易や交換が行われていた。（コ克蘭、ハーベンディング 2010：43）

先に見たように、ダンバー数とは、ヒトが安定的な集団関係を維持できるとされる人数の認知的な上限であり、ダンバーによって約150人程度とされ、かかる小さな群れを本稿ではヒトの原基的な集団と見なしている。この小規模の群れを超える集団では、メンバー同士のつながりと集団としての結束を維持するためには、より拘束性のある規則・決まり事とその現実への適用が必要になると想定される。そうであるならば、旧石器時代末期に起きた認知能力の向上によって、ヒトは原基的集団を結び付ける観念的紐帯を構想することができたので、ダンバー数を超える集団を形成するに至ったのであろう¹⁵⁾。つまり、ダンバー数を超える集団形成は、集合的知的能力の累積の結果、つまり、（ハラリによると）《認知革命》の結果であった。

14) そのほかに、リドレー；クライン、エドガーなどを参照。

15) 認知能力向上を集団現象として強調しているのが、マット・リドレーである。「人類の持つこの並外れた変化の能力を説明するときに、頭の中を覗くのは、私に言わせれば見間違いだ。それは、一つの脳の中で発生したのではない。複数の脳のあいだで発生した、集団的現象なのだ」（リドレー 2010：17）。

集団の閉鎖性打破については、これまでインセスト・タブー（近親相姦の禁止）が、その根拠の一端として、盛んに議論されており、膨大な研究の蓄積がある。ヒトが暮らす小さな群れが閉鎖的なままであったのなら、近親での相姦を繰り返すか、あるいは、最強の男子による女子の独占状態になるので、どちらにしろ、恒常的なインセスト状態になってしまう。インセスト・タブーは、結果的に、かかる小さな群れの閉鎖性を打破したはずだが、その理由の一端を合理的に説明しようとしたのが、フランスの人類学者クロード・レヴィ＝ストロースであった。彼は、例えば、著作『親族の基本構造』において、交叉いとこ婚は容認されながらも平行いとこ婚は禁忌扱いされている社会があるという事例から、近親相姦の禁止は、自分の集団の女性を他の集団に贈与することで、結果的に集団間で女性を交換するという、ある種の契約を集団間で締結することで族外婚を進めようとした意図があるという説を提起した¹⁶⁾。

その集団にとって、族外婚は、「よそ者を身内にする」過程なのだから、外部のよそ者集団が身内集団へと変貌することになるので、集団の閉鎖性を打ち破ることができる。インセスト・タブーによって、族外婚が推進され、それだけバンドという、当初の狭い集団を拡張することができたと言えるであろう¹⁷⁾。知的能力の向上の結果、インセストがタブー視されたのであるならば、インセスト・タブーは、族外婚を促すことで、小さな群れを拡大する契機となったのは間違いないであろう。

3. 首長制社会 (chiefdom) の遍在

これまでのヒトの歴史において、そのほとんどの期間、第一類型・第二類型で見たような小規模血縁・婚姻組織や部族・リネージなどで暮らしてきた。前8000年頃、農耕がメソポタミアの一角で始まると、やがてユーラシア大陸の各地に拡散して、定住化が進み、集落が数百人規模まで

16) 丹野正は、かかる人類学者の「起源神話」を批判して、次のように述べている。「『インセストの禁止』は人間社会すべてに普遍的な制度なのではなく、原初の人間社会の起源よりもずっと後の時代に、『制度上の血縁者たち』とその集団を創出する原理として、そして、複数の出自集団・クランから成る『部族』というまさに『制度に基づいた社会』を編成する原理として、打ち立てられたものである」（丹野 2009：3）。

17) インセスト・タブーが制度になる時、集団はダンバー数を超える規模にまで大きくなれる。「ダンバー数を超えて多くの人たちと繋がること、そこに制度を誕生させる重要なカギが隠されている。[...] インセストの禁止が制度として登場するのは、クランやリネージなど、ダンバー数を大きく超えた集団が想定される時である。[...] クランやリネージ（それ自体が制度的組織である）がダンバー数を超えて人びとを繋げるとき、インセストは初めて制度的に禁止しなくならなくなったのである。なぜダンバー数を超えて人が繋がる時制度が生まれるのだろうか。150人を超える集団では、人は認知能力を超える人びとと関係することになる。どのような相手であったか思いだせないほど多くの人と関係する場合、対面的に慣習的な秩序を構築するのはむずかしい。この場合、超越的な制度を持ち込まないかぎり、秩序形成するのもおぼつかないのかも知れない」（曾我 2013：30-31）。

拡大してきた。バンド、部族よりも大きなかかる集団を首長制（あるいは、首長制社会）と呼んでいる¹⁸⁾。

首長制には、集団全体にとって重要な決定を下すための実際の権限を持った、多かれ少なかれ恒久的なフルタイムの指導者がいるという点で、バンドや部族とは異なっている。首長制における指導者は通常、人類学者によって首長 (chief) と呼ばれている。政府の機能は本質的に首長が担っている。首長の周囲に側近がいて、首長の決定を手助けする事例もあるが、通常、専門職からなる官僚制は存在しない。もっとも、アフリカの発達した首長制社会には、最高位の首長が一人いて、その下に行政面の各機能を担う下位の副首長が何人かいるという事例もあるが、これはむしろ例外的であった。また、過去のハワイやポリネシアには、最高位の首長がいて、その下に何層かの副首長格の側近が機能していた。首長制は、過去に、ヨーロッパ、アジア、米国南東部、カリブ海の島々、アマゾンでも存在していた (EARLE 1987: 281-288; 2011: 34; CLAESSEN 2011: 16-17; GIBSON 219-222)。

再分配という経済の仕組みが市場経済が発展する前に重要であったことは、経済人類学者のカール・ボランニーが提起していた。墳墓での埋葬品を見ると、首長とその家族は特別な処遇を受けていて、通常は一般の人々よりも高い生活水準を維持していた。これを可能にしているのは、首長が社会全体にわたる経済的再分配機能を実行しているためである。かかる経済的機能は、露骨な再分配というよりも、通常、儀式的な贈与という名目で実施されている。この機能は、基本的に農家から余剰農産物を吸い上げ、社会全体に再分配することを意味する。その再分配過程で、首長たちのより贅沢な生活をサポートするために、少しの差分が留保される (EARLE 1987; CLAESSEN 2011: 10-12)。

首長制における余剰食料やその他の物品の儀式化された再分配は、ある意味、課税制度の初歩的な始まりであるが、課税という意味だけでなく、社会の安定に加えて経済的利点も得られるため、人々に容認されていたと考えられる。首長制が大きな領土を抱えて、さまざまな環境地域を包含する場合、国内で生産された多様な生産物を適切に流通させて、分配する必要性が生じる。各地の余剰生産物を全国的規模で再分配することは、不作の際の備蓄を提供するとともに、国民全体に食料の多様性を提供する方法として役立つことになる。例えば、農民は作物の一部を提供して、代わりにさまざまな種類の食物を獲得できれば、再分配は、彼ら自身の生存のための安定と国内での地位強化に役立っている (EARLE 1987: 291-298)。

アジア、オセアニア、中南米、アフリカ、さらにヨーロッパ各地に遍在していた首長制社会

18) Chiefdom については、多数ある関連文献の中でも、サーヴィス (1979) ; EARLE (1987, 1989, 2011); CLAESSEN (2011); CHABAL, FEINMAN & SKALNIK (2004); GRININ & KOROTAYEV (2011, 2012); GIBSON (2011); SKALNIK (2004); *Encyclopaedia Britannica*: chiefdomなどを参考にした。

も、そのほとんどの事例が階級のない社会であるという点で、バンドや部族と同じ第二類型（疑似親族型）に入る。ただし、首長制社会において、階級はないが、ランク（上下関係）は存在する。首長は親族関係の最上位に位置する。他の人々は通常、首長からの系図上の距離の観点からランク付けされる。首長制社会内の各親族のランクと、さらに、各親族内の個人のランクで、首長制社会全体における個人のランクが決まる。それゆえ、祖先が重要な人物であればあるほど、祖先から今日までの子孫の家系図を維持することは、最重要の使命とされている。しかし、近代国家社会における社会階層化とは異なり、首長制社会は、ランク社会なので、そこにおける地位の上下関係は、一時的・相対的・流動的であった¹⁹⁾。

Ⅲ 大規模組織——国家と社会階級の成立（よそ者をよそ者のまま取り込んだ集団）

第一類型（親族型）のように、よそ者を排除して、親族と身内だけで集団を作ろうとすると、メンバー数に象徴される小さな規模（例えば、150人）の集団しかできない。第二類型（疑似親族型）のように、集団を拡大するには、何らかの方法でよそ者同士が仲間になって（つまり、疑似親族化して）、非可視的集団を作れば良い。ヒトは、旧石器時代末における認知能力の向上によって観念的な絆を想定して、非可視的集団を作れるようになった。その結果、部族・リネージ・首長制社会などを作ることで集団の規模を拡大してきた。よそ者を仲間・身内に変えて、中規模の集団を作ってきたのである²⁰⁾。

しかし、身内・仲間の範囲は自ずと限定されるし、そもそもよそ者の疑似親族化は、手間暇かかるので、急激な集団拡大には向かない方法である。それならば、よそ者をよそ者のまま、変更せずに取り込んでメンバーにすること（第三類型）ができれば、集団を急速に拡大できるはずだが、果たして、そのような方法があったのだろうか²¹⁾。

19) フォレストが、(本稿で言う)第二類型における統治の特性を第三類型(支配・従属型)との対比でうまく描写している。「村落社会では、何を統制するにも、それができるかできないかの権限はステータスの問題である。年長者の権威は、彼が物資の供給、道具、女性などを統制しているという事実から来るのではなく、彼が年長だという事実から来る。血統的な判断基準をもとに、そのグループの中でどんなステータスにあるかが、彼が管理および組織的な責任を行使するように導いていく。前3千年紀の都市国家のような込み入った社会でも同じ事が真実である」(FOREST 2005: 200)。

20) 曾我亨が「他者との関係」で興味深い整理をしている。「これら三つの社会を整理すれば、ブッシュマンは『他者とは顔をあわせない社会』、ガブラは『制度的に他者をクランの外部に追いやり、クラン内部には他者がいないとする社会』、わたしたちは『制度的に他者との共存を目指す社会』ということになるだろう。もちろん、これらの分類は理念的なものにすぎない」(曾我 2016: 66)。

21) 本稿では、アッカドのサルゴンが史上初めて「よそ者をよそ者のままで併呑した第三類型の集団」を組織化した時、「国家とは、主権と社会階層化を基礎とする」という遊牧民型がその後の国家形成の準則となったと主張している。その裏には、もちろん、「かかる準則には従わない非遊牧民型の国家形成も

1. メソポタミアにおける初期都市国家の生成

部族・リネージ集団を本格的に超える数千人から数万人規模の組織が成立するには、初期都市国家がメソポタミアの沖積平野で形成される今からおよそ5500年前（紀元前3500年）を待たねばならなかった。エジプト・インダス・黄河・長江など、他の地域での本格的な都市化もほぼ紀元前4千年紀から前2千年紀の事象であると言えよう（中川洋一郎 2017c）。

メソポタミアの都市国家において、最盛期の人口は数万単位であったが²²⁾、しかし、都市住民である彼らはよそ者同士ではなかった。メソポタミアにおいては、神殿経済からエンシ経済、さらに、王室経済へと発展したが（中原 1959）、ラガシュのパウ神殿に見るように、これらの都市国家の社会的・経済的基盤は、神殿経済と呼ばれたように、神殿共同体にあった（山本 1958）。都市国家に集まってきた人々は、氏族を元に結集して集団労働に従事していた（中原 1968: 5）。彼らは、信仰を同じくする信者なのだから、いわば仲間・身内である。いくら大規模とはいえ、また、（都市）国家とはいえ、同じ神を信仰する共同体がその基礎にあった。その統合は、同じ信仰の下で仲間となった人々が結集した集団、つまり、疑似親族原理であって、本稿で言う第二類型の集団と規定できよう。氏族を元に結集していた集団の長、つまり、氏族長がデスポット（専制君主）のはずはない。

神殿国家仮説（Temple-state hypothesis）は、今から100年ほど前の1920年代に、アントン・ダイメル（Anton Deimel 1865-1954）によって提起された。それによると、前3千年紀中頃のシュメールの、すべて、あるいは、ほとんどの農地は神殿の所有地であり、その結果、神殿が南メソポタミア経済を管轄していた。都市経済は、神中心主義的館として機能しており、それゆえ、政治的指導者たちは、神々の家政を管理するという職能から、彼らの権限の根拠を得ていた。メソポタミアの指導者・王の最重要な役割と義務は、神殿の建設と維持だった。神殿の建立に捧げられた供物を見るとその重要性がわかる。何よりも、メソポタミアの都市国家における王の役割は、temple（神殿）の創設・維持管理にあった（FOSTER 1981: 225-226; TSOUPAROPOULOU 2014: 17）。そもそも軍事的な展開の前に神殿が社会を組織化していたのであり、神殿支配（temple dominance）が軍事的な防御の前に展開している事例も指摘されている²³⁾。

あったはずだ」という心積もりがある。「国家の起源」という大問題については、例えば、FOREST（2005: 186-188）が、「アッカドのサルゴンによる建国は歴史上の一大転換だった」という立場から、これまでの研究史を要領よくまとめているので、問題状況がわかる。

22) 前4～前3千年紀に限ると、メソポタミアの初期都市国家で最大の人口を抱えていたのは、ウルクであり、前3100年頃に、居住者は4万人だったと推定されている（ALGAZE 2013: 74）。しかしながら、当時の都市人口の推定は、不確定要素が多いので、非常に難しい作業である（VAN DE MIEROOP 1997: 95-97）。

23) ADAMS 1956: 228; POWELL 1977; FOSTER 1981. アントン・ダイメルが提唱した神殿国家仮説は、今日に至るまで、かなり厳しい批判に晒されてきた。神殿以外の民間部分を無視できないというのが批判の主

狩猟採集民が定住を開始し、およそ1万年前から農耕が始まり、前5000年頃から、大河の下流域における灌漑農耕が始まった。ムギの栽培を中心とする灌漑農耕には、巨大な労働力が必要であり、そのためには、氏族を元にした集団労働の編成が不可欠であった。かかる疑似親族型の組織編成の結果、氏族長が力を持つてくることは容易に想定される。かくて、初期都市国家は、ユーラシア大陸では、メソポタミア・エジプト・インダス・黄河という、四カ所の大河の流域で生成したが、これらの四つの地域は、いずれも大河のほとりに建設された農業を基盤とする小さな都市国家であった。部族から首長制社会へ、さらに都市国家へと展開したのであるが、その進化的展開において、都市国家と呼ばれる史上初の集団は、人口数万人規模の（当時としては）大都市となった。

しかし、ユーラシア大陸における初期の都市国家は、1000年ほど経過すると、大きな困難に見舞われた。混乱の理由は、塩害化、気候冷涼化、都市機能崩壊など、さまざまに論じられている。しかし、最終的には、遊牧民系の来襲によって、その結末を迎えた²⁴⁾。初期都市国家は、第二類型（疑似親族型）の諸集団であったので、遊牧民の来襲に耐えて、国家として存続する体制を築いていなかった。長期間存続する条件を持っていなかったのである。

2. 国家形成は、むしろ、希有の出来事

文明とは、一般に、国家の出現、社会階層化、そして、文字の開発によって構成される²⁵⁾。かかる文明は、イギリスの先史学者スチュアート・ピゴット（1910-1995）によると、適切な環境があれば、どこでも、いつでも生成できたのではなく、むしろ、その出現は奇跡的なことであった。

私は、文明とは通常の史的発展だとは思わないし、もちろん、「文明は、適切な環境が与えら

要部分と言える。その結果、この仮説にはかなりの修正が施されている。しかし、依然として、都市国家群は神殿共同体を基礎とする第二類型（疑似親族型）に属していると言えるのではないか。

24) 一般に、初期文明の崩壊については、環境と気候の劣悪化が主要な原因とされる。メソポタミア文明については、Weiss et al. (1993)、インダス文明については、長田 (2008) を参照した。しかし、最終的に、疲弊した各地の初期王朝を襲った侵入者たちは、概ね、遊牧民系であった。すなわち、メソポタミアは、アッカド、アモリ、カナン、アラブ (cf: 中川洋一郎 2017c)。エジプトは、ヒクソス。インダスは、自滅説が大勢だが、結局インド・アーリア人が侵入して、支配者となった。

25) 「階層化と国家とは文明には欠かせぬ構成要素だったから、一般社会進化は文明が出現する前に終わったのである」(マン 2002: 47)。「レンフルー (1972年・13頁) に従えば、文明は儀式センターと、書くことと、都市という三つの社会制度を結合させる。これら三つが組み合わさると、自然および他の人間に対する集合的な〈力〉に一段の飛躍が生まれるので、先史時代と歴史時代の記録にどれほどの流動性と不ぞろいであろうとも、何か新しいものの始まりが認められるのである。レンフルーはこれを『隔離』への飛躍と呼ぶが、それは人間を明確で固定的な、閉ざされた社会的・領域的境界のなかに囲いこむことである。私は社会的なケイジ (檻) という隠喩を用いる」(マン 2002: 46)。

れば、ほとんどどこでも、いつでも生成するものだ」という、人口に膾炙した考えにも同意しない。私は、これまで行ってきた自分の研究成果から、我々が文明と呼ぶものの生成は、極めて異常で、予測不可能な出来事であったと確信している。おそらく旧世界で起きた出来事すべての中で、およそ5000年前に西アジアの限られた地域でユニークな環境諸条件が一回限り揃った希有の出来事に、結局は、起因するのであろう。[…ある研究者が]「アフリカとかアメリカが、文字やその他の技術を発展させられなかったのは何故かと問うのは、かなり無慈悲であるばかりか、不正確でもある。かかる物事が起きたことこそ、驚くべき事象なのだ」と書いていたが、その通りである。むしろ、私は、古代では非文明社会の方が標準であって、技術的に革新的であった諸社会に対する非文明社会の貢献を、排除したり、否定したりすることはできないと提起したい。(PIGGOTT 1965: 20)

マイケル・マンは、彼の著作の中で、上記の一部を引用した後に続けて、「ピゴットは誇張しているにしてもほんのわずかだということ——おそらくユーラシアにおいて文明を発祥させた特異な環境の組み合わせは、多くとも四セットしかなかった」（マン 2002: 47）と書いている。この指摘は、極めて重要である。

人類史上、99%以上の期間、世界各地で狩猟採集生活が営まれてきた。今からおよそ1万年前に、新石器革命が起こり、農耕が開始されるにつれて、ランク社会が世界各地で発生した。しかし、進化史的にどこにでも国家・階級社会が形成されたのではなかった。文明をもたらした環境（国家・社会階層化・文字）は、ユーラシア大陸では、マンによると、わずかに「四つのセット」しかなかった²⁶⁾。つまり、ピゴットも、マンも、国家・階級社会・文字の生成は、進化史的に自然の発展経路でできたのではなく、例外的な事象であったと主張している。

先に見たように、首長制社会は、ヒトとヒトとの絆（諸関係）を基礎に形成されているので、部族社会などと同様に、拡大家族・疑似親族の範疇に属する。首長制を巡る大きな議論の一つが、首長制と国家との関連である。進化史的な観点からは、ヒトの集団は、《バンド→部族→首長制→国家》へと順調に発展してきたと主張される（CHABAL *et al.* 2004: 26-27; SKALNIK 2004: 78）。ヒトの歴史において、この段階までの集団は、各地に広範に存在したが、しかし、この制度が持つ桎梏（規模制限の枠）を乗り越えた社会は、むしろ、稀であった。例えば、前3千年紀から前2千年

26) 「グレート-ブリテン島、ブルターニュ、スペイン、マルタ島の驚嘆すべき『巨石』遺跡は、おそらく紀元前3000年から2000年にかけての複雑な社会組織と、大規模な労働力管理と、天文学の知識と、宗教的儀式的存在を示しているが、これはたぶん近東での趨勢とは独立に発展したものだ。しかしこの時期、近東の発展は決定的な類型にきていた。おそらくは灌漑技術発達の結果としてメソポタミアに高密度の永続的居住地が出現し、紀元前3000年頃、読み書きと都市国家と神殿と階層制度——要するに文明——とともに歴史時代が現われ出た」（マン 2002: 50）。

紀（旧石器時代末期）のヨーロッパでは、各地に中規模の集団が形成されていた²⁷⁾。しかし、これらの中規模の集団は、基本的に、国家へと至らなかった。四つの地域にあった初期都市国家もまた、永続化せずに、やがて崩壊した。第二類型（疑似親族型）の集団が、拡大して国家の規模にまで至るのも希有の出来事なら、また、国家として存続するものもなかなか困難であった。

3. アッカドのサルゴン王によるシュメール都市国家群の征服

メソポタミアの初期都市国家は、前24世紀から前23世紀にかけて、アッカドのサルゴンによって、征服され、支配下に置かれた。サルゴン（中年代説によると、在位は前2334-前2279年）は、セム系アッカド族の出自で、伝説によると、キッシュ市のウル・ザババ王の宮廷で盃酌官（Cup-bearer）となり、ウルク第三王朝のルガルザゲシ王との戦いに勝利して、権力を掌握した²⁸⁾。彼は、強大な軍事力を有して、南メソポタミア、シリア、アナトリア、エラム（イラン西部）を征服して、メソポタミアにおいて、史上初の多民族国家（つまり、帝国）を建設した²⁹⁾。史上初のアッカド系の王朝を樹立し、メソポタミアにおけるその後の軍事的伝統の創設者となっ

27) 「先史時代のヨーロッパにおいて、平等主義的でおおむね役割分化的でない定住村落はおおよそ50—500人で構成され、通常は核家族の小屋に住んで最大限おおよそ200ヘクタールを耕作していた（ピゴット 1965年・43-47頁）。近東では人数の上限はもっと平均に近かったろう。先史時代に、大規模でヨリゆるやかな部族的単位が存在した証拠もたくさんある。フォージ（1972年）によれば、今日のニューギニアの新石器人のあいだでは、400—500人の限度に達すると居住地が分裂するか、役割と地位の分化が起こる。この点はスチュワードの進化理論と合致する——すなわち、成長する集団は複合リネージ村落とゆるやかなクランの発展を通じて、ヨリ高度でヨリ混合したレベルの『社会—文化的統合』へと達する、という理論である（1963年・151-172頁）。水平の裂け目と垂直の裂け目とが、社会集団の数の増大を促進するのである。[／] 自然を内向集中的に利用することが定住と、50人ではなく500人の人びとの原初的で高密度な相互行為を可能にし、役割分化と権威の発生とが、原理的には無数の人びとのあいだでの二次的な相互行為を促進した。拡大包括的な社会、分業、そして社会的な権威が、今、人間の先史時代を開始したのである」（マン2002：53）。

28) サルゴンについては、伝記や業績も含めて、多数の文献が言及している（例えば、ホークス 1978：101-105；ROUX 1992：151-160；LEICK 2002：141；VAN DE MIEROOP 1999：59-75；GREGORY 2016；SCHRAKAMP 2016；小林登志子2005：173-174）。サルゴンの遺業については、粘土板や石碑の記録（royal inscriptions 王碑文など）として残されているが、同時代よりも、後代に作成された遺物が多い。例えば、ETCSL（BLACK *et. al.* 2006）で英語訳を読むことができる。最も古い遺物は、今から約4000年前に楔型文字で記録された極めて貴重な歴史資料だが、今日の独裁・専制政権が「公式」に発表する統計や文言が権力者の意に沿うべく、恣意的に大いに盛られているように、サルゴン関係の逸話や業績も大いに脚色されていると見るべきであろう。しかし、それも含めて例えようもなく貴重な遺物である。

29) 前田徹によると、シュメールの王たち、つまり、エンシャクシュアンナ、ルガルザゲシは「国土の王」を使用したのに対して、サルゴンは、「全土の王」を唱えたが、「国土の王」と「全土の王」は、意味が異なる。その理由は「[サルゴンが] 新興都市アッカドをキッシュの権威を継承する都市と認知させるため」であった（前田 2017：84）。

た。より正確には、現在に至るも有効な帝国建設のノウハウ、つまり、「他民族を征服し、支配し、統治するには、如何にしたら良いのか」を例示した³⁰⁾。彼の治世における実績は、王碑文などに残された事績によると、以下のように整理できる。

第一が、侵略肯定のイデオロギー（「戦争神学」Theology of war）³¹⁾に裏打ちされた軍事力増強である。攻撃的なイデオロギーと現実の精強な軍事力が相俟って、盛んな侵略を支えて、軍事的征服を可能にした。世界支配を目的とする「戦争神学」は、すでに初期王朝時代から芽生えており、ウルク第三王朝のルガルザゲシ下に大いに醸成されていたが、それが一段と強化され、本格化したのがサルゴン時代であった。戦争による世界支配というイデオロギーが明確になり、対外侵略戦争が正当化され、強化された³²⁾。一方、特筆すべきは、サルゴンが活用できた強大な軍事力と優れた組織力である。その中核的な戦力として、史上初の常備軍が創設された³³⁾。「平時の農民が戦時に兵隊になる」（疑似親族型）のではなく、「あらかじめ常勤の兵士を選んで、備えておく」（機能本位型）という、史上初の職業軍隊であり、組織編成原理の転換の実例となった（後述）。

第二が、商業・貿易の振興政策である。彼は用意周到にも、交通・輸送網を建設したが、それ

30) 「サルゴンは、政治・宗教・軍事戦術において、巧みな策略家であったので、彼の帝国が成立した折には、国全体の圧倒的マジョリティの文化を掌握することに成功した。ひとたびメソポタミアを征服すると、彼は政治的・宗教的プロパガンダを制度化して、彼の支配を確実なものとした。帝国の統治を確実にするために、サルゴンは、新規の軍事的戦術、宗教的変革、巨大なインフラを建設するためのエンジニアリングを駆使した。サルゴン帝国は、メソポタミアの文化を変えただけでなく、いかにして人民を征服し、支配し、統治するかという点で、世界観をも変えた。サルゴンが採用した手法は、20世紀末になっても模倣されたので、彼は『帝国建設の父』とまで称えられるに十分値する」（GREGORY 2016: 447）。一言では、「最新のテクノロジーを駆使して培った軍事力で敵を凌駕し、征服したら（嘘でも良いから）プロパガンダで大衆を懐柔し、懐いてくれば『よしよし』と宥めるが、歯向かえば徹底的に弾圧し、極刑に処することも躊躇しない」というのが、彼の統治実態の評価となるだろう。

31) 「戦争神学とは、神聖な力と神々のご加護による戦争の正当化」（SAZONOV 2019: 17）。

32) 「初期王朝時代の諸王（エアンナトゥム、エンメテナ、ルガルザゲシなどの諸王）は、すでに戦争神学に関して多くのアイデアを醸成していたが、後代の王たち（アッカドのサルゴン、ナラムシンなどサルゴン朝の王たちやウル・ナンム、シュルギ、アマル・シンなどウル第三王朝の王たち）は、初期王朝時代の王たちよりも一層効果的に戦争神学を運用すべく心がけていた。サルゴン朝とウル第三王朝の王たちは、戦争神学を彼らの侵略政策を遂行する上で、戦争を正当化するための道具として利用した。戦争神学は、彼らがアッカド帝国やウル第三王朝のような中央集権的な国家を建設する上で大いに役立った」（SAZONOV 2019: 43）。

33) サルゴンは、彼に忠誠を誓う5400人の常備軍を持っていた。軍事力として、革新的な戦術と「おそらくは遊牧民起源であろう」複合弓という高性能な武器を標準兵器として装備していたことが威力を発揮した（SCHRAKAMP 2016: 3）。一方、シュメール人たちは、基本的な武器は手持ちの槍（spears）であり、方陣形に隊列を組んで盾を持って戦ったが、「その恐るべき魔力が全土を覆い尽くす」アッカド軍は、距離を取って投げ槍（javelins）を投擲し、さらに遠方から大量の矢を射かけて、敵陣を粉砕したのである（ホークス 1978 : 218）。

は、常備軍の兵站機能を確保するうえで大いに役立った³⁴⁾。インフラ（道路・港湾）を整備して、インダス川地域・オマーン・湾岸諸地域との貿易を盛んにして、レバノン杉の森からアナトリアの鉱山までも資源開発に役立たせた。占領したシュメール都市国家群と、その他の都市間で実施されていた既存の交易網のおかげで、商業貿易が大いに賑わった（GREGORY 2016）。交易網の整備に必要な海運業も、大いに発展させた（STAPLES 2020）。印章もまた、通商面と文化面でも画期的であり、商業貿易を大いに賑わせた（JACK 2020）。

第三が、域内の各種制度の統一と全国的な公共事業（インフラ整備）の推進である。国土における統一的政策として、征服下のシュメール都市国家群にはアッカド系の側近を知事（エンシ）として任命し、官僚機構の整備・活用を実現し、以後の国家・帝国型統治の模範となった。インフラ関係では、大規模な公共事業を実施した。中でも、郵便制度を創設し、道路・灌漑設備の改良工事を行い、文化芸術・科学の振興を図った³⁵⁾。

第四が、各都市の中核であった神殿共同体の破壊である。とりわけ重要であったのが、各都市国家の独自の宗教の破壊であった。サルゴンは、各都市で祀られてきた神々に代えて、エンリル神を敬うように強制した³⁶⁾。彼はシュメール全土で彼の信仰を浸透させるために、娘のエンヘドゥアンナをウルの神殿の女神官に任命した³⁷⁾。神殿と教団を屈服させて、王の意向に従わせること

34) サルゴンを始め、一連のアッカド諸王が実施した東方への軍事活動に関しては、PASZKE (2022) に詳しい。同論文は、アッカドの暴力的な軍事攻撃は、イデオロギー的・宗教的な裏付けを持っていたと主張している。侵略・略奪の源泉として彼らの考え方には攻撃的な要素を指摘できるが、そこには極めて遊牧的な要素が暗示されている。彼らが信仰した女神イシュタルは、すこぶる好戦的で、侵略と略奪を強烈に求めた。優れて侵略・略奪に駆り立てる宗教的動因があったと語られている（PASZKE 2022: 79-81）。サルゴンたちアッカド人は、信仰を前面に出して、自分たち自身の侵略的本性を吐露していた。

35) 「状況が劇的に一変したのが、古アッカド王のサルゴンと彼の後継者たち（リムシュ、マニストゥシュ、ナラムシン）がシュメールとアッカドを征服して、新しいタイプの国制——すなわち、アッシリア学においてアッカド『帝国』としばしば言及される中央集権的領域国家——を創造したときである。古アッカドの王たちはかなり複雑な官僚制を創設した上で、彼らが作った新しい国家・官僚制度のヒエラルキーの頂点に、無制限の権力を有する強力かつ強権的な王（例えば、アッカドのナラムシン、シャル・カリ・シャリ）を据えた。この王朝の王たちが企てた統一化政策は、国制・イデオロギー・単位・暦・宗教など、すべての分野を対象として実施された」（SAZONOV 2019: 52）。

36) 「サルゴンは、宗教を管轄下に置くことで、メソポタミアへの支配をさらに一層強化しようとした。サルゴン以前は、各都市国家は、『神殿都市』のイデオロギーの下にあり、『都市は、それぞれ一体の神の領域である』と信じられていた。神殿都市は、それまで他の利権集団が包摂的な政治的集団を作って各都市国家を飲み込もうと試みるとき、宗教的指導者たちの特権と同時に個別の都市国家の自治権を擁護する方向で、抵抗してきた。まさにサルゴンは、都市国家の利権を打破するような、包括的な政治集団を作ることに成功したのである」（POLLOCK 1999: 193）。

37) 「今やサルゴンは彼の神学を押しつけようとしたのだから、神殿都市の宗教をコントロールするすべを見い出す必要があった。サルゴンは、彼の家族と各宗派とを、それぞれが信仰する神々ともども、結びつけようと考えた。以前すでに彼は、『自分はエンリル神によって保護され、国を統治するよう運命付け

は、同じくすでにメソポタミア初期王朝時代に開始されていたが、本格化したのはサルゴン以降のアッカド時代だった³⁸⁾。神殿と教団を権力に屈服させることこそ、戦争神学を効果的に推進するために必要だった。かかる意思表示は、自分のイデオロギー以外の思想は許さないという、イデオロギーの統一であり、後の帝国建設の準則になった。すなわち、宗教的統一という名の思想統制であり、現代の専制・独裁諸国家にも通じる全体主義的な思想統制の先駆けである³⁹⁾。

第五が、対内的な国民懐柔政策と反乱に対する苛酷な弾圧であった。サルゴンは、メソポタミアに建てられた史上初の多民族帝国であるアッカド帝国の創設者として、対内福祉・支配下人民の懐柔政策を重視していた。伝説では、サルゴンは、弱者が守られる社会を建設したと標榜されている。彼の統治下のシュメールでは、誰も食糧を物乞いしないし、寡婦も孤児も守られていたとされた。シュメールの諸都市国家を比較的容易に征服できたのは、もちろん、強大な軍事力によるが、一方では、都市住民に対して、サルゴンは「[[われわれは] 都市の裕福な貴族に敵対しているの、貧者の味方である」という、プロバガンダを巧みに実施していた。敵の指導者たちに対する大衆の反感を醸成したのは、その一端である。彼の出自にまつわる（有名な）伝説には、「偉大な王サルゴンは、卑しい出自から出発して人々を救うための権力を得た英雄である」と匂わせるような文言がある（GREGORY 2016: 448）。彼以降の王の統治と比べると黄金時代と考えられていた。しかし、（だからこそ、かもしれないが）人民向けの懐柔政策の一方で、アッカドによる領域支配は、非支配者たちが逆らった場合は、非常に苛酷かつ強権的であり、徹底していた⁴⁰⁾。サルゴ

られている』と宣言することで、かかる考えを明示していたのだが、しかし、それではまだ不十分だった。さらに一層コントロールを強化するために、サルゴンは自分の娘を、ウルの守護神である月の神ナンナの最高神官として任命した。かくて、サルゴンの娘は、母親同様、神の妻となったのである。さらにサルゴンは、娘とシュメール人たちとの結びつきを強めるために、娘にエンヘドゥアンナ（『天国にふさわしい女神官』の意）というシュメール風の新しい名前を付けた」（VAN DE MIEROOP 2007: 66）。「サルゴンは、彼の娘を高位の女神官に就けることで、シュメールの重要な都市であるウルにアッカド人の知事を派遣できたので、家系の権利として、さらに支配の権限を強化した。DINGER（神）は、通常は崇拜の意で神々と神物に使われたが、しばしば王の名称にも限定詞として DINGER（神）が添えられるようになった。ひとたび民衆がサルゴンを神々の代替（神格化）と見なし始めると、新しい多民族帝国を支配するという点で、彼の残りの治世において、彼の王としての統治は強化された」（GREGORY 2016: 450）。

38) 「次のサルゴン朝の時代になると、戦争イデオロギーがさらに発展し、陶冶されただけでなく、『宇宙の支配 universal control』の理解が展開した。そのことは、まずメソポタミアの歴史において、宇宙の王（šarkiššati (m)）とか、四方面の王（šar kibrat arba'i (m)）という、真に宇宙的王権タイトルが初めて使われたことや、さらに、史上初めて、生きている人物が神格化されたことに表れた」（SAZONOV 2019: 54）。

39) 「神殿と宗派を屈服させることとそれらを王の下に置くことは、すでに初期王朝時代に開始されていた。しかし、これら政策もまた、古アッカド時代に踏襲された上に、通常の政策となった」（SAZONOV 2019: 54）。

40) 例えば、二代目のリムシュ王（サルゴンの息子）の時代、ウル、ウルク、ラガシュなど、メソポタミ

ンの統治下では、反乱も普通に起きたが、彼に敵対する者どもは「牙と爪を持ったライオンに刃向かうのと同じ [ように苛酷な処分を受ける]」(MARK 2009)と彼は宣告しており、アッカド朝では反乱都市に対する苛酷な報復・多数の死刑執行が実施されたという (SCHRACKAMP 2016: 4).

4. アッカドは、帝国だったのか、それとも都市国家の進化形だったのか

サルゴンがシュメールの初期都市国家群を征服し、前24世紀末にメソポタミア一帯に史上初めて領域国家を建設したことは、史実として概ね認められている。しかし、帝国建設に関するサルゴンの歴史上の意義については、大きく評価が分かれている。議論は、初期王朝時代における「都市国家の延長線上の国家」説と、国制史上、分水嶺ともなる大きな転換を引き起こしたという「史上初の帝国」説とに二分されている。

初期王朝時代（およそ前2900年から前2350年まで）、メソポタミアでは、主として、アッカド人は北部に、シュメール人は南部に居住していた。サルゴンは北部から出発して南部の諸都市を制圧したのだが、もともと両民族はかなり混在し、「深刻な民族対立はなかった」(小林 2005: 183)ので、両民族間の軋轢はなかったと論じられることが多い⁴¹⁾。マリオ・リベラーニは、サルゴンが建てた国家は、すでにルガルザゲシなどが志向していた領域国家の延長線上にあるので、「アッカドを最初の帝国と呼ぶべきではない」と言っている⁴²⁾。さらに、今から50年以上前になるが、中原与

アの主要な六つの都市で反乱が起きたとき、前例にないほど残虐な仕方で容赦なく鎮圧された。ウンマでは市民8900人が殺され、3540人が捕虜となったのを始め、リムシュ王の戦役で5万4016人が殺害されたか、捕虜になった (PASZKE 2022: 76)。一方、同戦役では、8万5816人（あるいは、8万4556人）が、殺害か捕虜にされ、これは徴兵可能な男性人口の3分の1から4分の1に該当したという (SCHRACKAMP 2016: 4)。

41) 「ただサルゴンを、セム人によるシュメール人との争いの勝利者と理解すべきではない。サルゴンに支配権を与えるのは、シュメール人の最高神であるエンリルである。サルゴンは捕らえたルガルザゲシをニップルのエンリル神殿まで連行しているし、彼の王碑文はエンリル神殿に奉獻されている。彼はシュメール文化の庇護者でもあった。彼は娘をウルの月神ナンナの女官とし、彼女はシュメール語で多くの作品を書きのこしたという。これ以後、約2000年にわたって、メソポタミアの王はサルゴンにならって、娘をウルのナンナ神殿に送りこむであろう」(前川 2011: 37)；「シュメール人とアッカド人は言語が違い、おそらく顔立ちもちがったが、共通の神話を持って信じていたことは間違いない。シュメール人が作った文明・文化をアッカド人がそのまま受け入れたといったほうがいいかもしれない」(前田 2003: 109-110)。

42) 「アッカド以前から諸帝国は存在していたというのが事実に基づく批判である。もう少し正確には、『帝国 empire』という用語と概念は、他のいくつかの事例（アッカドと比べても薄弱ではない）にも適用されているからである。後期ウルク期のウルクから古文書史料のエブラまで、シュメール南部における、事実上、まさに「原・帝国」と呼べるような国家建設がそれらの事例である。アッカド帝国が絶対的な新規性であるとは決して言えない。[...] 従って、『史上初の帝国としてのアッカド』という文言は、『史上初の』という形容詞についてだけでなく、『帝国』という名詞についても批判の対象となっている」(LIBERANI 1993: 3)。

茂九郎が「すでに都市国家首長（エンシ）はデスポット〔専制君主〕だった。都市国家の時代から専制王朝が続いていた」⁴³⁾と強い調子で主張している。前田徹もまた、「アガデ〔アッカド〕のサルゴンは、王権の概念をルガルザゲシから借りたので、彼が王権の新規の、あるいは、革命的な地理的認識・概念を作ったのではなかった。劇的な変化は、ナラムシンの統治まで起きなかった。サルゴンは、彼の前のルガルザゲシと同じく、領域国家時代の王であった」（MAEDA 2005：22）とサルゴンの業績・事績の革新性には否定的である。前田は、さらに「前三千年紀メソポタミアの王権は、社会組織としての氏族を前提にはしていない」（前田 2009：57）と述べている。

一方、一大転換であったという立場から、例えば、ジャン＝ダニエル・フォレストは、「サルゴンがハビトゥス *habitus*⁴⁴⁾を根本的に変えた」という表現で、アッカド帝国出現の国制史上の意義について述べている。

本来の国家という用語は、前2300年頃のサルゴンによる統一後にできた国に限定して使うのが良いと思う。単に劇的な変化の規模だけでなく、主として、進化のダイナミズムがそれまでとは完璧に違うからである。その時まで、統合のより高い水準に至るためには内的なメカニズムの変化に基盤を置いていたので、変化は緩慢かつ事実上、非可視的であった。変化の起源は、不透明なハビトゥスの中で、集団的に取られたイニシアティブの中にあった。変化は、これまでいわば、長い伝統に根付いたある種の総意によって起きていたのである。それに反して、サルゴンは、力尽くの総攻撃で、新しい解決策を押しつけた。彼の企ては、暴力的かつ大きな痛みを伴うものだったが、彼個人のイニシアティブそのものに基づいており、その意志は通常のハビトゥスの範疇には入らない異端の部分に属していた。サルゴンが、自

43) 「単一都市を越えた領土国家の君主を専制君主とみなす考えが存在する。はたしてそうであろうか。〔／〕筆者は本稿において、ジェイコブセンが『原始民主政』の段階にあると想定したシュメール古拙文書の時代から、確固たる王権がすでに存在したことを確認した。すなわち、シュメールにおいては『原始民主政』から『世襲王朝』へ転換したのではなく、専制王権（デスポティズム）が連続的な発展をとげたのである。〔／〕領土国家や世界帝国の君主のみがデスポットであるのではなく、都市国家の支配者もまたデスポットである。デスポティズムの原理は、支配と被支配の上下の関係であり、支配領域の大小によるものではない。〔…〕筆者は、デスポティズムは宗教的なものを支配のイデオロギーとして利用するのであって、従って、デスポットは世俗的性格を持つという観点から、彼らの行政・経済文書を分析して、かの結論を得た」（中原 1968：20）。しかしながら、本稿の主張は、「アッカド帝国の建国は、疑似親族型集団とは異なる別の組織編成原理に基づく集団を成立させたという点で、遊牧民型国家の最初の事例であった」という趣旨なので、リベラーニや中原の考えと大きく異なっている。そもそも疑似親族型の集団に、もちろんランク型社会につきものの上下関係はあるが、何でも自分で決められるデスポットなどいない。

44) ハビトゥス (*habitus*) とは、「所与の特定の環境の中で習得され、身についたものの見方、感じ方、ふるまい方であり、ほとんど意識的に方向付けられることなく作用する性向」（『現代社会学事典』弘文堂、2012年、1040頁）。

分が極端な企てを抱くようになった状況、それらを実現可能にした状況、それらすべてにお構いなく、彼が、彼の企画完遂のために断固としてヘゲモニーの掌握を目指していたのは間違いない。[シュメールの] 諸都市国家は、かくて、進化の通常プロセスの最終段階として出現していた。すべての都市は過度に堅牢に構築されていたので、次の高度な段階へ平和的に移行することはできなくなっていた。膠着状態を克服するための最終手段として、もはや進化的なメカニズムではこれ以上発展が望めなくなった時に、解決策としては最終手段として、破天荒な仕方でも提示されたのが、国家であった。[サルゴンによる] 変化が、一つの歴史的イベントによって引き起こされたのは確かだが、同時に、膠着状態に陥っていて解決策がどうしても必要だったという意味で、構造的な問題でもあった (FOREST 2005: 198-199; FOREST 2004: 79)。

フォレストの主張によると、アッカド帝国の建国は、それまでの集団に関するハビトゥスを根本的に変えたので、都市国家 (city-states) とサルゴンの国家 (state) とでは決定的な断絶がある。他にも「[サルゴンの治世] メソポタミアの歴史において、結節点となっている」(MICHALOWSKI 2020: 707) というように、歴史的意義を強調する向きは多い。しかし、これらの議論に欠けているのは、「大転換とは何であり、それが如何にして引き起こされたのか。その動因と動機は何だったのか」という視点である。つまり、遊牧民型の組織形態の適用であったという視点が欠けていると思う。

IV 遊牧民型統治の特異性

1. 後代の遊牧民諸王朝によるサルゴン称揚

都市国家の領袖であるルガルザゲシとサルゴンの事績は、一連の考古学的史料などによると、両者の間にあまり大きな違いはない⁴⁵⁾。表面的には、領域国家の建設という、ルガルザゲシが試みて、失敗したことを、サルゴンは広範囲に拡張して成功した。それゆえ、考古学的史料に基づく限り、ルガルザゲシとサルゴンとの差異をそれほど認めることができないというのは、十分に理のある議論であろう。

45) 都市国家群が制度として行き泥んでいたことについて、「サルゴンと呼ばれる個人が解決策を出したのか、あるいは、誰か別の人物だったのかはどうでも良い。事実、彼の前にすでに何人か (例えば、ルガルザゲシ) が試みたが、あまりうまくいかなかった。とはいえ、最後に付け加えれば、サルゴンと彼の後継者たちが関係した (われわれが定義するような意味での) 国家は、王碑文などに書かれていることによって何が起きたかはわかるが、考古学的には依然として不可視的であり、不明瞭なままである」(FOREST 2005: 199)。

一方、サルゴンの事績は、王碑文などの歴史資料にかなり詳しく記載されているので、数奇な生い立ち（捨て子伝説）から権力の掌握を経て、周辺地域への侵略・征服まで、物語として面白いほどよくわかる。しかし、文字史料としては、同時代のものは少ない。サルゴンと同時代の碑文を誠実にコピーした楔型文字史料も存在するようだが、ほとんどは後の古バビロニア時代に作成された⁴⁶⁾。

サルゴンの逸話が、どれほど真実に沿うものであったのかわからない。しかし、後代の古バビロニア時代の遊牧民王朝の王族たちがサルゴンを賞賛して、自分たちの統治形態（遊牧民型統治）の元祖だとして、繰り返し称揚していたことは真実だと思う⁴⁷⁾。つまり、サルゴンが遊牧民型の組織形態を適用して、国家を初めて建設したこと、とりわけ、サルゴン以降の遊牧民系の王朝史において、遊牧民型の組織として礼賛されてきたこと、後代の遊牧民たちが「これこそが、われわれによる統治のモデルだ」と称揚し、熱心に褒め称えたこと、これが決定的に重要ではないかと考える。では、後代の遊牧民たちは、サルゴンの統治の何に「これこそ、われわれが目指すものだ」と、共感したのか。

それは、主権のなんたるかと組織編成原理の転倒だったのではないか⁴⁸⁾。

2. 農耕定住民文化と遊牧民文化の軋轢、史上初の事例

アッカド帝国の存続期間は、せいぜい百数十年と、比較的短かった。サルゴン王朝としては、およその推定で、前2334年にサルゴンが創設し、その後、四代の王が次々に継承し、前2193年に崩壊したとされる。メソポタミア地域を含む西アジアには、アッカド以降、次から次へと遊牧民系民族が来襲し、前2017年にアモリ人のイシン・ラルサ王朝が成立して、いったん落ち着く

46) アッカドのサルゴンに関するこの間の碑文史料に関しては、例えば、VAN DE MIEROOP (1999: 59-73) に詳しい。

47) 西アジアで、サルゴンの令名はあまねく周知されていた。サルゴンの死後、1000年経っても、いや、2000年経っても名声は衰えることはなかったようである。「エジプトでもサルゴン伝説は読まれていた。エジプトのアマルナでも、バビロニアの遺文の中に、アッカドのサルゴンが言及されていた。芸術作品もまた彼の力を示していて、彼の帝国が滅亡した後も、何世代にわたって非常に高く評価されていた。新アッシリア帝国最後の王、ナボニダス（在位 前556から前539年）もまた、サルゴンの像を見つけると、神殿の中で飾り、礼拝を欠かさなかった」（VAN DE MIEROOP 2007: 284）；「サルゴンは、彼の手に届く限りの戦略的な分野（つまり、単位・神殿・暦）で、新しいタイプの統一化政策を導入した。この政策は、後のウル第三王朝でも、イシン・ラルサ時代にも引き継がれた。バビロンのハンムラビ、さらに後代のメソポタミアの数多くの王たちによって活用された」（SAZONOV 2019: 22）。

48) ベルトラン・ラフォンも、「サルゴンを過小評価してはいけない。なぜなら、彼は、それまで存在しなかったような何か新規のものを創造し始めたからだ」と、彼の歴史的革新性を非常に高く評価している（LAFONT 2017: 172）。ただし、サルゴンが「創造」したことが歴史上、全く新規のものであったのはなぜかという問題が残っている。

ことになる。サルゴンによるアッカド帝国の建国は、その後何度も繰り返されたメソポタミアにおける遊牧民の来襲に先鞭を付けたのは、明らかである。

前5000年頃から、シュメール人がチグリス・ユーフラテス両川の下流域に進出して灌漑農耕を開始した。彼らが都市国家を建設するのは前3500年頃である。アッカド人は、前4000年頃という、比較的早くからメソポタミア中流域に進出して、定住していた。アッカド人は、セム系の言語（アッカド語）を話していた。セム系民族は、遊牧民系の伝統を持っている。サルゴンはアッカド語を母語としていたようだが、ただし、彼の生き立ちを伝える伝説では彼が遊牧民文化・生業に浸っていたかどうか不明である⁴⁹⁾。むしろ、遊牧民文化とあまり関係がない環境に育ってきたようにさえ見える。

しかしそれにしても、サルゴンによるシュメール都市国家群の制圧は、定住農耕民文化と遊動遊牧民文化との軋轢そのものであり、すでにメソポタミア地方で遊牧が開始されてからおよそ2000年間にわたって繰り返されてきた両者の軋轢における遊牧民の勝利の最初の事例である。ただし、アッカド帝国の設立は遊牧民文化の最初の勝利というだけではなかった。その後の国家建設のための準則そのものを変えたのだと思う。

初期都市国家のメンバー（成員）は、神殿国家として、共通の神を崇拝する信徒の共同体を作っていた⁵⁰⁾。信徒の共同体なのだから、それは、「よそ者を仲間・親族にしてできた集団」に他ならない。それを支えていたのは血統・出自などで上下の区別があるランク社会であり、本稿で言う第二類型（疑似親族型）の集団である。この状況下、まさにサルゴンの征服活動の勝利によって、国家とは、第二類型（疑似親族型）の延長線上に位置するのではなく、「よそ者をよそ者のまま組織内に組み込んで作る集団」という、いわば遊牧民型の国家が、少なくとも西アジアの広範な地域において、正統化かつ正当化されるようになったのである⁵¹⁾。

49) 「彼はハーバル川がユーフラテス川に合流する地方で、半遊牧的な羊飼いの息子として幼少時代を過ごしたようだ。とするならば、他の野心的なセム人の若者たちと同様に、彼は一旗揚げようと平原部の豊かな都市をめざして、ユーフラテス川を下る旅に出たにちがいない」（ホークス 1978：101）。

50) 初期王朝時代からアッカド帝国の時代が過ぎ、領域国家のウル第三王朝の時代（前22世紀から前21世紀）になっても、依然として神殿共同体は存続し、機能していた。エンリル神と王との関係は、前田によると、「メソポタミアでは、統一国家確立期であるウル第三王朝になっても、王は都市神の祭儀権を奪うにしても、都市神を追放し、その神殿を破壊することはなかった。都市と都市神が核になる都市国家的伝統が根強く存続するのである。ウル第三王朝は、都市国家的伝統を換骨奪胎して、自らの都市ウルの都市神ナンナをエンリル神の長子として最高位に押し上げ、地上世界における唯一の王は、最高位に昇った都市神の加護のもと、神々が定めた秩序をこの地上に実現するための執行者と位置付けた」（前田 2009：55）。

51) フォレストによると、「サルゴン以降、世間の間で、総合的な合意が形成され始めた。ウル第三王朝が、アッカド王国の遺産を継承して、好戦的な方法ではなく、管理された仕方でも国家を建設することで、アッカド王国の達成したものをさらに改善するのに、自分たちがふさわしいと早急に主張し始め

小さな群れから中規模の集団までは、進化史的に順調に発展できても、そこから先に展開するには、高く厚い壁があった。第一類型・第二類型においては、組織編成・組織維持の原理・原則がヒトとヒトとの絆（今村が言うところの social）であった。ヒトとヒトとの絆をいかにして形成し、維持するのか。それらのヒトの集団では、例えば、本家・分家、幼長など、血縁に基づく集団内のカテゴリー区分と上下関係はあっても、それらは一時的・相対的・可変的であった。それに対して、サルゴンの勝利によって、「支配・従属型の集団こそ国家である」という準則が正しいことになった。その結果、国家の形成には、絶対的・恒久的・不変的な区別（つまり、階級）が不可欠だという、前者とは全く異なる原理・原則が打ち立てられたことになる。第三類型（主権・社会階層化）の集団としての国家は、遊牧民が中央集中的権力と組織編成原理の転換を実現したことで成立した。シュメール都市国家群は、神殿共同体というヒトとヒトとの絆に基づく以上、その壁を、そのままでは乗り越えられなかったのである。

3. 牧夫によるヒツジ群管理

シュメール初期王朝時代には、すでに「戦争神学」、つまり、宗教を活用して侵略を正当化するという好戦的な侵略思想が芽生えていた。しかし、アッカドのサルゴンが建国したアッカド帝国には、シュメール初期王朝時代とは一線を画す違いがあった。独裁とも言うべき権力の強固な中央集権的あり方と、有無を言わさぬ強権的弾圧（強権的手法）である。これらの特性はどこから来ていたのか。もちろん、牧夫の天性からである（中川洋一郎 2017c）。

《肥沃な三日月地帯》で穀物生産が開始してから1000年ほど経つと、群居性草食動物（特にヤギやヒツジ）が家畜化され、周辺の乾燥地帯で遊牧も始まった。群居性草食動物の飼育は、少数の牧夫と多数の家畜の群れから形成されているので、牧夫と群れを一つの集団として捉えて、支配者を牧夫として、ヒツジなどを人民（被支配者）と見なすのは自然の成り行きであろう。すでに都市国家の段階から、この種の文言があった⁵²⁾。シュメールの王たちもまた牧夫を自称していた⁵³⁾。牧

た。サルゴン朝の大胆な活動は、ある意味で、歴史の合意形成のネットワークでは違反行為であった。たとえそれが、状況の重さに耐えきれずにハビトゥスが歪められたことが原因であったとしてもである。とはいえ、一方ではヘゲモニーの新しい概念、他方では堆積層の周辺部分での第二次的な政治活動の発展が、変化の第一原因として戦争を引き起こした。進化史的プロセスは、出来事に満ちあふれた歴史の背後に消え去り、とうとう最後には統合の究極的レベルである帝国が出現した。かかる視点からすると、サルゴンの冒険は、決定的な断絶と見なすことができるだろう。いずれにしろ、それは革命的であった。より高いレベルへの統合の移行は、前例のないメカニズムで遂行されたからである」（FOREST 2005: 200）。フォレストは抽象的な言葉遣いなので、いささかわかりにくいのだが、「サルゴンは、第二類型（疑似親族型）を破壊することで、国家なるものを創設した」と言っているように、筆者には思える。

52) 『「バウ女神はウルカギナの母」[...]』とか、『ウルクガにある産殿(?)のバウ女神はウルカギナを牧者として産み給うた』[...]の表現も存在する。後者は、君主が人民を治める『牧者権』[...]を有する

図表2 遊牧民型統治の起源と特徴

	最高権力者	非支配者	上下関係	処遇	組織編成原理
			一方的	苛酷	職能先行原則
遊牧組織	牧夫	ヒツジ	ヒツジは牧夫の意のままに動く定め。牧夫とヒツジとの間には相互の意思疎通はあり得ない。	もともとヒツジは資源として消尽されるために飼育されている。遅かれ早かれ屠殺される。	ヒツジは、牧夫に毛・乳などを日常的に供給し、さらに最終的には死んで肉を提供するという機能を持つので飼育されている。
帝国	君主	人民	君主の命令は絶対的	君主に逆らった人民には極刑が待っている。人民もヒツジと同じ運命にあり、逆らえば、極刑の時期が早くなるだけである。	人民が持つ各自の職能(機能)を基準にして、社会が組み立てられている。人民もまた、どこかの家系に属する(疑似親族型)から国家の一員となるのではなく、労働して何かを生産する(機能本位型)から国家の一員となる。

(出所) 筆者作成

夫・ヒツジという自律した組織内での統治の特徴は、図表2のようにまとめられる(中川洋一郎2017b)。

1) 牧夫によるヒツジ群への命令は、絶対的・一方的

遊牧組織における統治の原理・原則は、絶対的かつ一方的である。ヒトと動物との間には、言葉によるコミュニケーションはないので、そもそも対話なるものが成立しない。言葉を使用するのは、対話のためではない。一方的な命令である。もちろん、牧夫は命令のために言語を発しているが、ヒツジたちが人の言葉そのものを理解しているのではない。

と記した最初の文献であろう。」(中原 1968: 19);「多数のアイデアとか現象が前2千年紀さらには前3千年紀のシュメールとアッカドに起源を持っている。例えば、王にはライバルはいない、王は人類の牧夫だ、上の海から下の海まで、あるいは、東から西まで支配する支配者の崇高な起源とか、[アラビア]海で武器を洗うなど。」(SAZONOV 2019: 44); 指導者を牧夫に擬えている点について、ETCSLのThe cursing of Agade: c.2.1.5に次の文言がある。Its king, the *shepherd* Naram-Suen, rose as the daylight on the holy throne of Agade.; 他にも、The building of Ningirsu's temple (Gudea, cylinders A and B) : c.2.1.7に、次のような文言がある。The true *shepherd* Gudea is wise, and able too to realise things. 他にも、The true *shepherd* Gudea (真の牧夫グデア)の例示は多数に上る(BLACK *et al.* 2006)。なお、グデアはラガシュの王。

53) 「『羊飼い sipad』はシュメール王たちがしばしば自称する称号で、支配者を暗示する表現である」(辻坂 2021: 19)。

第一類型・第二類型では、組織の成員たちの間に上下関係はあれど、基本的には、成員たちとの相談・同意が組織維持のための基本的原則である。首長など上位の者からの命令は、言葉で伝えられ、下位の者たちはそれに従うか、嫌なら組織を離れるしかない（逆に、離れば良い。身命は救われる）。

疑似親族原理の世界では、つまり、相談・同意の世界では、よそ者を統治するのに、「よそ者を疑似親族化するほかにすべはなかった」というよりも、そもそも「よそ者を統治する」すべがなかった。それに対して、遊牧民型統治では、よそ者をよそ者のまま組織内に取り込むことができる。それは、相談・同意の世界から、強制・極刑の世界へと移行したからである。牧夫は、その権限は排他的でシェアされない（unshared）ので、すべてをひとりで自分勝手に決められる。統治そのもの、つまり、「真の統治」の出現と言える（中川洋一郎 2020）。

ある一人のメンバー（牧夫）が多数のメンバー（ヒツジ群）を殺すことを前提に統治しているという組織運営の原則は、初期遊牧組織が成立した時、史上初めて出現した。この時、集団の類型において、ランク型に加えて、支配・従属型が新しく付け加わった。牧夫がヒツジ群に対して有する権限、すなわち、絶対的・無制限・排他的権限こそ、主権の起源である。統治者の権限が無制限（unlimited）であるというのは、それまでの、身内集団（第一類型）と疑似親族集団（第二類型）では、およそ想定すらできない原理・原則である。主権のなんたるか、そして、罰令裁判権（流血裁判権）の起源がここにあると思う⁵⁴。

2）組織編成原理の転換による絶対的な支配・従属型の成立

疑似親族型（第一類型・第二類型）における組織編成原理は、まずヒトを確定して、その後に仕事を配置するという、ヒト先行型である。例えば、バンドにその事例が典型的に表れている。バンドでは、ヒトをまず選別するという原則があり、これこそ疑似親族原理が支配的な組織での組織編成原理である。バンドを超えるネットワークという集合体を支えているのは個々人の自由・非拘束・非束縛であった。実態調査からの研究成果によると、個人が移動して別のバンドを選ぶ時、その彼（彼女）は別のバンドに属するヒトを見て、ヒトを基準にバンドを選んでいる。逆に、受け入れるバンド側もまた、そのヒトを見て、ヒトで受け入れるかどうかを選んでいるので、そ

54) 「理屈で考えると、罰令裁判権・流血裁判権の起源は、牧夫によるヒツジ群の処遇にある」というのは、筆者の想定に過ぎない。実証はなかなか困難である。これまでにその粘土板が発見された古代シュメール法（ウル・ナム法書、リピト・イシュタル法書、エシュヌナ法書）は、いずれもサルゴンの治世以降のものと推定されているが、これらの「古代シュメール法においては、同害報復の規定は見出すことはできない。古代シュメール法では、犯罪に対する刑罰は基本的に財産刑であった。同害報復をはじめ規定したのがハムラビ法典である」（加藤 2017：5）。つまり、「同害報復」が法典に規定されるのは、サルゴンの没後、500年以上経過してからである。

の組織編成原理はヒト先行型である⁵⁵⁾。

すでに見たように、「シュメールの王 ensi たちは、都市国家と呼ばれる巨大な農園を神の名において管理していた」(LIBERANI 1993: 3) というように、社会の基盤には農園があったのであるから、初期王朝時代までのシュメールもまた、第二類型であり、まずヒトが先行して決定されていた。サルゴンは、征服した諸都市を次々に破壊していったが、都市国家を潰すことは、まずヒトとヒトとの絆(疑似親族型組織)を破壊することであった。

一方で、サルゴンは、常備軍を創設することで、機能本位原理への転換を開始していた。中原与茂九郎によると、シュメール初期王朝時代の中堅的成員は、ほぼすべて「平時における集団労働」に従事していた労働者であり、「戦時になると兵隊」になった。組織編成原理という視点から言うと、ヒトはまず「中堅的成員」として決定されており、その後の必要に応じて(つまり、戦時になると)戦闘員としての機能を付加された⁵⁶⁾。果たすべき機能(乳・肉などの資源供給)を先行して決定した後、組織メンバー(ヒツジ群)を決定するという、遊牧民型の組織では、戦闘機能がまず先行して決定された。従って、組織編成原理が、第一類型・第二類型と第三類型とでは正反対なのである(中川洋一郎 2019d)。

3) 群れとしての人間管理

牧夫は一人で数百頭のヒツジを統制しなければならない。場合によっては、牧夫は、500頭にも上るヒツジ群を意のままに管理して、彼らを大人しくさせておく必要がある。不必要に怖がらせ

55) 寺島による「個人が選んでいるという、バンドの特性」の指摘は、組織編成原理の観点から非常に重要である。バンドについて、血縁によって気がついたらすでに所属していたという側面もあるが、一方では、所属を変更することも可能で、その場合、個人が選んでいるという側面がある。「狩猟採集社会では『強制』ということがない(クラストル 1987)。人は基本的には他人の意志に左右されることなく行動することができる。他人に命令されることを嫌い、他人に命令することも避ける。これは狩猟採集民の代表的な価値観である平等主義(egalitarianism)の現れのひとつであるが、バンドの流動性もそこを源泉としている。あるバンドに所属するのも、また、そこから出ていくのも個人の選択であり、個人の決断である。そのような個人的自由と主体性に支えられた選択の結果としてバンドの流動性が生まれている」(寺島 2009: 192)。

56) 「シュメール社会では、都市の中堅的成員はほぼすべて、通常は集団労働に従事した。そしてこの集団労働組織は容易に軍事組織に転化することができた。集団労働組織と軍事組織をまったく別個のものとして扱えたり、またどちらか一方のみでシュメール社会を規定したりすることは誤りである」(中原 1968: 12)。第二類型のシュメール都市国家群が農民による軍隊であったのに対して、サルゴンは、史上初めて、常備軍を作り上げた。これはあらかじめ、軍人という機能を先行して決定し、その後に、それにふさわしいヒトを選んで当てていることである。組織の作り方において、職能先行型であり、先のヒト先行型とは、正反対の方向である。つまり、遊牧民の組織では、まず機能を先行して決めてから、組織メンバーを選定している。サルゴンの成し遂げたことは、ヒトとヒトとの絆によって構成される第二類型(疑似親族型)の破壊であった。

てはいけないので、家畜群の「操縦」は重要な技術であり、知恵も必要である。《仲介者》と呼ばれることが多い去勢ヒツジや牧羊犬を活用して、群れとしての家畜を管理している。ヒツジは、最終的には資源として消尽するが、当面は、懐柔するというのが、牧夫の心得である。

群れとしての家畜の管理が、群れとなっているヒトの管理へと応用されて、大衆の管理技術として適用された。統治する対象は、以前はヒトだったかもしれないが、今は家畜同様の存在（ヒツジ人間）なのだから、脅し・欺し・懐柔を含むあらゆる姑息な手段を使っても許される（中川洋一郎 2017c；2018；2019b；2020）。

神殿共同体というヒトとヒトとの絆を破壊した結果、世の中はバラバラになって、混乱してしまった。そこで、大衆向けのプロパガンダとして、サルゴンの統治下では、現代の専制・独裁国家群顔負けの人心誘導・陽動作戦が取られていたようである。サルゴンの帝国は、むしろ、大衆には益をもたらしたという評価さえある。大衆迎合的だったので、民族間の軋轢を緩和し、階級対立的紛争を軽減したという評価さえある。これは、非常に興味深い。サルゴンの統治は、現代の全体主義国家にも劣らぬ陽動作戦によって支えられていたようである⁵⁷⁾。

大衆の懐柔を行う一方で、敵に対しては峻厳に振る舞い、暴力的でさえあった。「シュメールの中心地域で反抗する現地の知事たちと支援者たちに対して、侵攻したアッカドの王たちは、極めて暴力的な軍事活動を取って、敵対する現地軍を粉砕した。その結果、アッカドの首都アガデを経由するアッカドと外国友邦諸国（メルハ、マガン、ディルムン）や北方諸国（シリアとレバノン）との取引において、商品の流通は乱れることなく順調に執り行われた」（PASZKE 2022: 81）。アッカド人による他民族（特にその指導者層）に対する苛烈な仕打ちには、宗教的要因が強かった。その宗教的原則は、すでに疑似親族原理（被支配者と共有しているはずの原理）を大きく超えていて、それを否定していた。

初期王朝時代のメソポタミアにも奴隷はいたが、比較的少数であり、その発生原因は債務不履行などが多かった。いわゆる債務奴隷である。すでに繰り返し見たように、サルゴンは、極めて積極的に対外侵略に打って出て、メソポタミアの広大な地域を支配下に治めた。占領した都市の

57) 「多くの研究者たち（Childe 1936: 115-116, 1942: 106-107, 124-125; Engels 1954; Fried 1967: 230）に依れば、国家は、富の平等な分配から生じた階級紛争をエリートの利益のために解決する。しかし、メソポタミアの場合を考慮すると、国家（私が定義した限りであるが）は明らかにエリートの利益には有害である。国家は、それまで富から遠ざけられていた民主の手に権力をもたらし、それによって、地方のエリートから所得の一部を奪うことは明らかだからである。新しい社会秩序が以前よりも平等であることなど全くないし、何も変えていないのだが、しかし、以前のルールに依って選ばれることのなかった人々に権力を与えることになった。一般人に話す機会を与えたのではないが、力を正義とした。国家は階級紛争を解決しないが、しかし、個人がほとんど尊重されることのない世界では統合の力は人民の蜂起を防ぐには十分に強いと考えても良いのではないか。仮に国家が何か紛争を解決するとすれば、それは都市国家間の紛争であった」（FOREST 2005: 201）。

城壁は、次から次へと破壊した。その結果として、多数の異民族の捕虜が発生していた。サルゴンは、筆者の推定によれば、優れて牧夫的天性の持ち主であった。かかる人物が無制限かつ独裁的権力を有する君主となって、大量の戦争捕虜を自己の裁量下に置いた時、彼らをあたかもヒツジのごとく扱ったとしても、不思議はない。すなわち、*chattel slavery*「家畜（動産）奴隷制」の誕生である。メソポタミアは、それ以前の比較的少数の債務奴隷が家内奴隷的に散発的に拘束されていた状況から、アッカド帝国の建国とともに、「家畜（動産）奴隷」の大規模出現によって、質的にも規模的にも奴隷を巡る状況が一変した可能性が高い。ヒツジのごとく拘束されて、あたりを集団で追い立て廻されて、公共事業などで大きな群れとして働かされている大量の奴隷を目の当たりにした当時の人々は、「世界が様変わりした」と実感したことであろう⁵⁸⁾。

おわりに——アッカド帝国の建国で芽生えた遊牧民型国家

サルゴンが建国したのが、シュメール人とアッカド人からなる史上初の多民族国家であるとしたら、その時点で国家という大規模組織が「よそ者をよそ者のまま、大規模に組織内に取り込んだ集団」として、つまり、遊牧民型の国家として、成立したことになる。遊牧民型の国家の成立要件を、繰り返して要約すると、(1)まず、無制限の(*unlimited*)権力が一人の人物に排他的に(*unshared*)集中するという主権のあり方。(2)次いで、ヒトとヒトとの人間的紐帯を基礎とするのではなく、職能を先行して組織を編成するという機能本位原理。(3)さらに、殺すために大量飼育しているという、家畜飼育を起源とする流血を厭わない過酷な反対者の処遇と、一方での大衆懐柔策。

主権とは、もともとは、牧夫によるヒツジ群に対する権限である。ヒツジ群に対する牧夫の権限は、*unlimited*（無制限・絶対的）かつ *unshared*（独断的・排他的）を特性とするが、そうだとすれば、主権とは、もともと牧夫（一人）が持つ大量のヒツジ群に対する権限のように、君主個人が大衆たる「人間ヒツジ」に対して行使する絶対的・独断的権力に他ならない。ここに主権の起源がある。

58) SHAHEEN (2009: 30-31) に、アッカドのサルゴンによる他民族奴隷化が物語的に記述されている。それまでの都市間の戦争と比べて、サルゴンが仕掛けたのは広範かつ大規模な侵略戦争であり、その結果として多数の戦争捕虜が生じたので、家産制内での散発的な債務奴隷制から大規模な階級的奴隷制へと移行の端緒となったはずだと、本文で筆者は想定している。しかし、*chattel slavery* の起源をアッカド帝国の戦歴に求めるのは、残念ながら、実証的に難題である。例えば、「初期王朝とアッカド朝の碑文史料には、戦争捕虜の捕獲・連行があったことの十分な証拠がある。しかし、これらの捕虜たちが《奴隷》と呼ばれている事例はほとんどない」(RICHARDSON 2023: 37)。なお、*chattel slavery* の日本語訳は、通常では、「動産奴隷制」であるが、*chattel* の原意は家畜である（家畜こそ、代表的な動産）ことから、「家畜となったヒトが奴隷だ」という意味で、「家畜奴隷制」の方が原意に則った訳ではないかと思う。

同時に、専制帝国の統治概念が出現した。すなわち、統治とは、上位の者が下位の者たちに命令して、その命令に従わせる。従わなければ、懲罰を下せるという、暴力行使の権限である。このことは、上位の者は下位の者たちに対して、死をも含めた生殺与奪の権を握っている（罰金裁判権・流血裁判権）ことを意味する⁵⁹⁾。従って、シュメール都市国家群との対比では、統治の仕方においても、慣習・慣例に基づき、相談と同意で進めるのか（疑似親族型）、それとも問答無用で強権的に進めるのか（遊牧民型）の違いがあった。サルゴンによる国内統一事業とは、単位・神殿・暦の統一であるが、しかし、単に中央政府があり、権力が集中していることだけを意味するのではない。国家意思に従わなければ極刑をも辞さないという無制限の権力行使に他ならない。初期都市国家においては、組織の統合原理が、疑似親族原理であったから、よそ者を仲間・親族に変えて組織を形成し、維持していく疑似親族化という緩くて、脆い統合であった。サルゴンは、かかる疑似親族原理を破壊したのである。

ルガルザゲシも都市国家の枠を出ようとしていたが、しかし、サルゴンにはルガルザゲシとは際違った相違点があった。サルゴンによる統治の特徴は、支配地域内におけるイデオロギーの統一と苛酷な弾圧にあった。プロバガンダの上手さは際立っていたようであるし、文化の興隆とは、自己の宣伝に他ならないのだから、サルゴンの統治は、現代の共産主義者顔負けの全体主義的専制統治であり、対外向けにも、国内向けにも、主権を容赦なく発動していたと言うべきではないだろうか。

引用文献

- 足立薫（2009）「非構造の社会学：集団の極相へ」河合香史編『集団—人類社会の進化』京都大学学術出版会、3-22。
- 伊谷純一郎（1987）「霊長類社会構造の進化」『霊長類社会の進化』平凡社、297-325。
- 今村仁司（2000）『交易する人間（ホモ・コムニカンス）：贈与と交換の人間学』講談社、584。
- 岩本見典・下田泰奈（2022）「新型コロナウイルス影響下における学生主体の地域活動の変化と今後」『地域創生学研究』5：13-32。
- 内堀基光（2009）「単独者の集まり：孤独と『見えない』集団の間で」河合香史編『集団—人類社会の進化』京都大学学術出版会、23-38。
- （2013）「死という制度—その初発をめぐって」河合香史編『制度—人類史の進化』京都大学学術出版会、37-58。

59) 「サルゴンを始め、古アッカドの諸王たちが国家の新しいタイプを創設したとき、状況は劇的に変化した。[...] 王たちは、官僚機構の頂点に位置し、強力で無制限の権力 (unlimited power) を有していて、しばしば神格化された」(SAZONOV 2019: 52)。アッカドのサルゴンによって政治世界が決定的に変わったのは、彼が無制限の権力の行使を開始したからである。それまで機能していた疑似親族原理を破壊して機能本位原理に従うことで、組織を遊牧民型に代替して、絶対的・無制限の権力行使が可能となった。それゆえ、サルゴンは、それ以降の専制君主たちに「模範」とされ、アッカド帝国は、「国家たるもの」の成立準則を示したと称賛されたのである。

- 大村敬一 (2013) 「感情のオントロジー—イヌイトの拡大家族集団に見る〈自然制度〉の進化史的基盤」河合香史編『制度—人類社会の進化』京都大学学術出版会, 327-348.
- 長田俊樹編 (2008) 『総合地球環境学研究所 プロジェクト H-03 「環境変化とインダス文明」2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト, 226.
- 尾上正人 (2016) 「オルソン理論とダンバー数」『奈良大学紀要』44: 129-142.
- 加藤恵司 (2017) 「同害報復の法思想」『聖学院大学論叢』22 (1): 1-18.
- クライン リチャード・G., エドガー ブレイク (2004) 『5 万年前に人類に何が起きたか?: 意識のビッグバン』(鈴木淑美訳) 第2版, 新書館, 318.
- 黒田末寿 (2016) 「霊長類社会における承認する他者, 不可解な他者」河合香史編『他者—人類社会の進化』京都大学学術出版会, 21-42.
- コ克蘭 グレゴリー, ハーペンディング ヘンリ (2010) 『一万年の進化爆発—文明が進化を加速した』(古川奈々子訳) 日経 BP 社, 312.
- 小林登志子 (2005) 『シュメル: 人類最古の文明』中央公論新社, 300.
- サーヴィス E. R. (1979) 『未開の社会組織: 進化論的考察』(松園万亀雄訳) 弘文堂, 211.
- 曾我亨 (2013) 「制度が成立するとき」河合香史編『制度—人類社会の進化』京都大学学術出版会, 17-35.
- (2016) 「他者が立ち現れるとき」河合香史編『他者—人類社会の進化』京都大学学術出版会, 65-86.
- 丹野正 (2009) 「種社会の単位集団から原初の間人社会のバンド (居住集団) と家族への進化」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』6: 3-30.
- 辻坂真也 (2021) 「古代メソポタミアの王権と神の関係: ウル第三王朝における王とエンリルの象徴の神格化」『一神教世界』12: 1-20.
- 寺島秀明 (2009) 「「今ここの集団」から「はるかな集団」まで—狩猟採集民のバンド」河合香史編『集団—人類社会の進化』京都大学学術出版会, 183-201.
- 徳田剛 (2007) 「よそ者概念の社会学的彫琢: G・ジンメルによる概念規定を中心に」『社会学雑誌』24: 97-111.
- 中川尚史 (2009) 「霊長類における集団の機能と進化史: 地理的分散の性差に着目して」河合香史編『集団—人類社会の進化』京都大学学術出版会: 57-87.
- (2012) 「霊長類における集団の機能と進化史—サルからヒトへ」『哺乳類科学』52 (1): 87-88.
- 中川洋一郎 (2017a) 「地球環境の悪化とユダヤ・キリスト教の人間中心主義—文明の (だが, 同時に環境破壊の) 起源としての遊牧—」『経済学論纂 (中央大学)』57 (3・4): 333-362.
- (2017b) 「群居性草食動物家畜化の衝撃—輪廻転生観の破壊という, 人類史上の分水嶺—」『経済学論纂 (中央大学)』57 (5・6): 257-284.
- (2017c) 『新ヨーロッパ経済史 I—牧夫・イヌ・ヒツジ—』学文社, 243.
- (2017d) 『新ヨーロッパ経済史 II—資本・市場・石炭—』学文社, 293.
- (2018) 「プラトン《魂の三分》説とデュメジル《三分イデオロギー》説—インド・ヨーロッパ語族民における歴史通貫的な統治原理—」『経済学論纂 (中央大学)』58 (3・4): 313-342.
- (2019a) 「ジョルジュ・デュメジル《三機能性》論, 1950年の蹉跎—神話形成期 (前4千年紀), 原インド・ヨーロッパ語族民組織における社会的三階級の不在という難題—」『経済学論纂 (中央大学)』59 (3・4): 399-433.
- (2019b) 「前4千年紀, 遊牧民としての原インド・ヨーロッパ語族民の生成—狩猟採集民による農牧文化の習得とステップへの進出という起業家的行動—」『経済学論纂 (中央大学)』59 (5・6): 235-272.
- (2019c) 「ジャン・ボダン主権概念の遊牧民的起源—前4千年紀, 遊牧三階層における権力構造とそ

- の後の主権概念の展開—』『経済学論纂（中央大学）』60（1）：195-226.
- （2019d）「職務序列表の公示（1945年）によるフランス企業内三階層の『国定化』—アメリカ・フランスにおける労務管理論の展開—』『中央大学経済研究所年報』51：171-209.
- （2020）「遊牧開始という、組織編成原理史上の分水嶺—前4千年紀、疑似親族原理から機能本位原理へ—』『経済学論纂（中央大学）』60（3・4）：115-149.
- 中原与茂九郎（1959）「『古代シュメールの社会経済の諸問題』の報告梗概』『日本オリエント学会月報』2（11-12）：1-4.
- （1968）「シュメール王権の成立と発展—ウルク古拙文書からウル第三王朝時代の文書まで—』『西洋史学』77（0）：1-20.
- ハラリ ユヴァル＝ノア（2016）『サピエンス全史（上）文明の構造と人類の幸福』（柴田弘之訳）河出書房新社，300.
- フェイガン ブライアン（2005）『古代文明と気候大変動—人類の運命を変えた二万年史』（東郷えりか訳）河出書房新社，366.
- フォーテス，エヴァンス＝ブリッチャード編（1972）『アフリカの伝統的政治体系』（大森元吉ほか訳）みすず書房，367.
- ホークス ジャケッタ（1978）『古代文明史 I メソポタミアの生活』（小西正捷ほか訳）みすず書房，330.
- 前川和也編（2011）『図説メソポタミア文明』河出書房新社，127.
- 前田徹（2003）『メソポタミアの王・神・世界観』山川出版社，182.
- （2009）「Martu—族長制度の確立—」前川和也編『シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語—研究集会「シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語」（平成20年1月26日～27日 於京都大学）報告集—』51-57.
- （2017）『初期メソポタミア史の研究』早稲田大学出版部，385.
- 松井健（1989）『セミ・ドメスティケーション：農耕と遊牧の起源再考』海鳴社，244.
- マン マイケル（2002）『先史からヨーロッパ文明の形成へ』（森本醇・君塚直隆訳）NTT出版，637.
- 三上勝也（1969）「インセスト・タブーについて—自然的要因と文化的要因—』『天理大学学報』21（1）：173-151.
- 森明雄（1990）「類人猿社会の祖先型の復元から人類社会へ』『アフリカ研究』36：69-85.
- リドレー マット（2010）『繁栄（上）—明日を切り開くための人類10万年史』（大田直子・鍛原多恵子・柴田裕之訳）早川書房，291.
- 山本茂（1958）「シュメール都市国家ラガシュにおける神殿の社会組織について：割当地保有者をめぐって』『史林』41（6）：581-604.
- ADAMS Robert M. (1956) Some Hypotheses on the Development of Early Civilizations. *American Antiquity*, 21(3): 227-232.
- ALGAZE Guillermo (2013) The end of prehistory and the Uruk period. In: Crawford, Harriet (ed.), *The Sumerian World (PDF)*. London: Routledge: 68-95.
- ARBUCKLE Benjamin S., HAMMER Emily L. (2019) The Rise of Pastoralism in the Ancient Near East. *Journal of Archaeological Research*, 27: 391-449.
- BLACK J. A. et al. (2006) *The Electronic Text Corpus of Sumerian Literature* (<http://etcsl.orinst.ox.ac.uk/>). Oxford 1998-2006.
- CHABAL P., FEINMAN G. & SKALNIK P. (2004) Beyond states and empires: chiefdoms and informal politics. *Social Evolution & History*, 3(1): 22-40.
- CLAESSEN Henri J. M. (2011) On chiefs and chiefdoms. *Social Evolution & History*, 10(1): 5-26.
- CULLEN Heidi M. et al. (2000) Climate change and the collapse of the Akkadian empire: Evidence from

- the deep sea. *Geology*, 28(4): 379-382.
- DUNBAR Robin I. M. (1992) Neocortex size as a constraint on group size in primates. *Journal of Human Evolution*, 20(4): 469-493.
- (1993) Coevolution of neocortical size, group size and language in humans. *Behavioral and brain Sciences*, 16: 681-735.
- (1998) The Social Brain Hypothesis. *Evolutionary Anthropology*, 6(5): 178-190.
- (2023) The Social Brain Hypothesis Thirty Years On: Some Philosophical Pitfalls of Deconstructing Dunbar's Number. *Annales Academiae Scientiarum Fennicae*, 1: 8-27.
- EARLE T. K. (1987) Chieftoms in archaeological and ethnohistorical perspective. *Annual review of anthropology*, 16(1): 279-308.
- (1989) The evolution of chieftoms. *Current Anthropology*, 30(1): 84-88.
- (2011) Chiefs, chieftaincies, chieftoms, and chiefly confederacies: power in the evolution of political systems. *Social Evolution and History*, 10(1): 27-54.
- FOREST Jean-Daniel (2004) La Mésopotamie aux 5e et 4e millénaires. *Archéo-Nil. Revue de la société pour l'étude des cultures prépharaoniques de la vallée du Nil*, 14: 59-80.
- (2005) The state: the process of state formation as seen from Mesopotamia. *Archaeologies of the Middle East, Critical Perspectives*, 184-206.
- FOSTER B. (1981) A new look at the Sumerian temple state. *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 24(3): 225-241.
- GIBSON D. B. (2011) Chieftom confederacies and state origins. *Social Evolution & History*, 10(1): 215-233.
- GREGORY James Patrick (2016) Sargon of Akkad: The father of empire building. *2016 NCUR*: 447-451.
- GRININ L. E. & KOROTAYEV A. V. (2011) Chieftoms and their analogues: alternatives of social evolution at the societal level of medium cultural complexity. *Social Evolution & History*, 10(1): 276-335.
- (2012) Emergence of chieftoms and states: A spectrum of opinions. *Social Evolution & History*, 11(2): 191-204.
- HALLPIKE C. R. (1986) *The Principles of Social Evolution*. Oxford: Clarendon Press.
- (1992a) Is there a primitive society?. *Cambridge Anthropology*, 16(1): 29-44.
- (1992b) On primitive society and social evolution: A reply to Kuper. *Cambridge Anthropology*, 16(3): 80-84.
- JACK J. (2020) The Akkadian Cylinder Seal-Metonym for Life in Akkad. *Pathways*, 1(1): 29-37.
- LAFONT Bertrand (2017) Akkad, l'empire charismatique (2330-2100). In: LAFONT Bertrand, TENU Aline, CLANCIER Philippe et JOANNES Francis, *Mésopotamie : De Gilgamesh à Artaban (3300-120 av. J.-C.)*, Paris, 165-199.
- LEICK Gwendolyn (2002) *Who's Who in the Ancient Near East*. Routledge, 256.
- LIBERANI Mario (1993) *Akkad: The First World Empire: Structure, Ideology Traditions*. Padova: Sargon srl.
- MAEDA T. (2005) Royal Inscriptions of Lugalzagesi and Sargon. *Orient*, 40: 3-30.
- MARK Joshua J. (2009) Sargon of Akkad. *World History Encyclopedia*. Last modified September 02, 2009. https://www.worldhistory.org/Sargon_of_Akkad/
- MICHALOWSKI Piotr (2020) The Kingdom of Akkad in Contact with the World. In: RADNER Karen, MOELLER Nadine and POTTS Daniel T. (dir.), *The Oxford History of the Ancient Near East, Volume 1: From the Beginnings to Old Kingdom Egypt and the Dynasty of Akkad*. New York, Oxford

- University Press, 686-764.
- NAKAGAWA Yoichiro (2021a) The Trinity and the Three-Tiered Structure in Proto-Indo-European Organizations: Consequences of Assigning Dogs the Role of Mediators. *Keizaigaku Ronsan (The Journal of Economics)* : Chuo University, 61(3・4): 65-94.
- (2021b) A Human-animal Organization as the Basis for Georges Dumézil's Trifunctional Theory: Three-Tiered Shepherd-Dogs-Sheep Hierarchy in the Herding Organization of the Proto-Indo Europeans in the Myth Formation Period (Fourth Millennium BC). *Keizaigaku Ronsan (The Journal of Economics)* : Chuo University, 61(5・6): 209-246.
- (2021c) National Endorsement of the Three-tiered Structure within French Companies by Publication of the Parodi-Croizat Ordinances (1945): Different Types of labour-management Theories in the United States and France. *Keizaigaku Ronsan (The Journal of Economics)* : Chuo University, 62(1・2・3): 127-151. DOI/10.24789/00013652
- (2022a) Evolution from Basic Communities to Developed Societies Brought about by Reversal of the Organizing Principles. *Keizaigaku Ronsan (The Journal of Economics)* : Chuo University, 62(4・5・6): 117-132.
- (2022b) Confrontation of Full-Cost and Marginal Principles in the Automobile Supply Chain: Implications of Durable Consumer Goods in the Market Turmoil after WWII. *Keizaigaku Ronsan (The Journal of Economics)* : Chuo University, 63(1・2): 57-75.
- (2022c) The Emergence of Proto-Indo-Europeans as Nomadic Pastoralists. *Keizaigaku Ronsan (The Journal of Economics)* : Chuo University, 63(3・4): 37-56.
- (2023) Is Judeo-Christian Anthropocentrism Responsible for the Degradation of Global Environment?: Nomadic Pastoralism as the Origin of Civilization and Environmental Destruction. *Keizaigaku Ronsan (The Journal of Economics)* : Chuo University, 63(5・6): 157-182.
- PASZKE Marcin Z. (2022) From Sargon To Naram-Sîn: some remarks on Akkadian military activity in the IInd half of the IIIrd millennium bc. The example of eastern campaigns. *Acta Archaeologica Lodziensia*, 68: 75-83.
- PIGGOTT Stuart (1965) *Ancient Europe, from the beginnings of agriculture to classical antiquity; a survey*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 343.
- POLLOCK Susan (1999) *Ancient Mesopotamia: The Eden That Never Was*. Cambridge: Cambridge UP, 259.
- PORTER Anne (2012) *Mobile Pastoralism and the Formation of Near Eastern Civilizations: Weaving Together Society*. Cambridge University Press, 389.
- POWELL Marvin A. (1977) Sumerian Merchants and the Problem of Profit. *Iraq*, 39(1): 23-29.
- RICHARDSON S. (2023) Mesopotamian Slavery. In: *The Palgrave Handbook of Global Slavery throughout History*. Cham: Springer International Publishing, 17-39.
- ROUX Georges (1992) *Ancient Iraq*. 3rd ed, Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 546.
- SAZONOV Vladimir (2008) Akkadi kuningavõim kui arhetüüp. Akkadian kingship as archetype in history. Ajalooline Ajakiri. *The Estonian Historical Journal*, 3(125): 195-214.
- (2019) *Aspects of royal ideology and religion in Sumer and Akkad in III millennium BC*. Tallinn University.
- (2020) Universalism and deification: The concept of the king of the four corners and the deified king in Mesopotamia in 3rd millennium BCE. *Verbum Domini Manet in Aeternum. Fs Randar Tasmuth*, 10-20.

- SCHRAKAMP Ingo (2013) Weaponry, ancient Near East. *Revue des Études Militaires Anciennes*, 2: 3-19.
- (2016) Akkadian Empire. *The encyclopedia of empire*, 1-10.
- SHAHEEN Yussouf (2009) *Rise and Fall of Gods in Historical Perspective*. Lulu. com.
- SKALNIK P. (2004) Chiefdom: a universal political formation?. *Focaal*, (43): 77-98.
- STAPLES E. (2020) Innovations in Early Maritime Technology in Mesopotamia and the Arabian Gulf. *Social Science Quarterly*, 101(7): 2539-2554.
- TSOUPAROPOULOU C. (2014) Hidden messages under the temple: foundation deposits and the restricted presence of writing in 3rd millennium BCE Mesopotamia. *Verborgen, unsichtbar, unlesbar: Zur Problematik restringierter Schriftpräsenz (Materiale Textkulturen 2)*. Berlin, 17-31.
- VAN DE MIEROOP Marc (1997) *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford : Oxford University Press, 269.
- (1999) *Cuneiform Texts and the Writing of History*. London, 198.
- (2007) *A history of the ancient Near East, ca. 3000-323 BC*. 2nd ed., Malden, Mass. : Blackwell, xix, 341.
- WEISS H., COURTY M.-A., WETTERSTROM W., GUICHARD F., SENIOR L. *et al.* (1993) The genesis and collapse of third millennium north Mesopotamian civilization. *Science*, 261(5124): 995-1004.
- (中央大学名誉教授 経済史学博士)